

諏訪市埋蔵文化財報告第29集

ジャコッパラⅢ

——平成5年度長野県黒耀石原産地遺跡分布調査概報——
(諏訪市霧ヶ峰ジャコッパラ遺跡群遺跡分布予備調査2)

1994. 3

諏訪市教育委員会

諏訪市埋蔵文化財報告第29集

ジャコッパラⅢ

——平成5年度長野県黒耀石原産地遺跡分布調査概報——
(諏訪市霧ヶ峰ジャコッパラ遺跡群遺跡分布予備調査2)

1994. 3

諏訪市教育委員会

JAKOPPARA vol. III

AN ARCHAEOLOGICAL SURVEY
ON JAKOPPARA SITES AT KIRIGAMINE,
NAGANO-PREFECTURE, JAPAN

1994. 3

THE BOARD OF EDUCATION
OF SUWA CITY

例 言

1. 本書は、長野県諏訪市霧ヶ峰南麓地域の平成5年度遺跡分布予備調査概要報告書である。
本分布予備調査は平成5年度国庫・県費補助事業市内遺跡発掘調査事業の一部として行なわれたものである。また、黒耀石原産地遺跡分布調査（諏訪市）を兼ねている。
2. 本調査は、諏訪市教育委員会が調査主体者となり、諏訪市教育委員会の編成するジャコッパ
ラ遺跡群調査団が調査を担当した。
3. 現場における発掘調査は平成5年8月5日から11月19日まで実施した。報告書作成作業は平
成5年12月から平成6年3月まで、諏訪市考古資料館において行なった。
4. 本文中の水糸レベルは標高の絶対値で示した。
5. 現場における記録と整理作業の分担は次のとおりである。
(遺構等実測) 五味裕史・青木正洋・田中総・小松とよみ・関喜子・原敏江・矢崎つな子・両角
南子・太田努・茅野嘉雄
(遺物水洗・注記作業) 小松・関・原・矢崎・両角・小島良一・宮坂茂子・太田・茅野
(遺物実測及びトレース) 田中
(図面写真整理・遺構トレース) 五味・青木・田中
6. 執筆分担はI章事務局、II～IV章田中である。
7. 各試掘グリッドの平面図及び土層断面図中の遺物ドットは下記のとおりである。

凡 例

- | | |
|------------|----------------|
| ▲・・・黒耀石製石器 | ■・・・黒耀石製石核 |
| ●・・・黒耀石製剝片 | ★・・・黒耀石原石（ズリ石） |
| ○・・・黒耀石製碎片 | □・・・土器 |

8. 各試掘グリッドの土層断面図は北面を用いている。
9. 調査の諸記録は、諏訪市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査及び報告書作成に際し、調査・整理参加者の他に下記の方々はじめ多くの方々に御
指導・御教示を得た。記して感謝申し上げる。(順不同・敬称略)
戸沢充則・森嶋稔・安蒜政雄・酒井潤一・辻本崇夫・大竹憲昭・小平和夫・宮坂清・野口淳・
門内政広・田中勝之・上桑原牧野農業共同組合・上桑原共有地組合・大建工業株式会社・渋崎
建設・長野県教育委員会文化課

目 次

I 調査に至る経過	1
1. 霧ヶ峰遺跡分布予備調査の経過	1
2. 過去における調査	1
3. 平成5年度調査の概要	2
4. 調査組織	4
5. 調査日誌	4
II 位置と環境	6
1. ジャコッバラ遺跡群をとりまく環境	6
2. ジャコッバラ遺跡と周辺遺跡の概要	12
III 平成5年度調査の概要と成果	13
1. KRC地区の調査	13
2. KRB・KRD地区の調査	16
IV 調査のまとめ	30
1. ジャコッバラ遺跡群における今回の調査範囲の位置づけ	30
2. ジャコッバラNo.12遺跡の調査の概要	31
3. 黒耀石原産地遺跡のなかでのジャコッバラ遺跡群の位置	39

I 章 調査に至る経過

1. 霧ヶ峰遺跡分布予備調査の経過

霧ヶ峰高原周辺からは、火山性ガラスである黒耀石が多く産出される。和田峠・星ヶ塔周辺の原産地から採取された黒耀石は、旧石器時代から縄文時代にかけて、広く関東・東海地方へ石器材料として運びだされ、利用されたことがわかっている。

黒耀石原産地の地元である諏訪地方各地では、黒耀石製の石器類を多量に出土する旧石器時代および縄文時代の遺跡が多数発見されている。これらの遺跡は、山麓部から諏訪湖盆にかけ、集散的に分布し、いくつかの遺跡群を構成している。しかしこれまで黒耀石原産地付近およびこれらを取りまく山麓部については、現況が山林・草原であることから、遺跡分布を把握することが困難であった。

このような状況をふまえ、長野県教育委員会および関係各市町村によりが計画され、各市町村による分布調査が進められる事となった。

諏訪市では、霧ヶ峰南麓一帯を覆うような形で大規模な開発計画がもちあがっており、遺跡の保護措置を協議するためにも山麓部における遺跡の分布状況をなるべくすみやかに把握する必要が生じてきた。そのため、文化庁および長野県教育委員会の指導のもと、遺跡分布予備調査を計画し、平成3年度より市単独事業として開始した。

この分布予備調査は、平成4年度からは上述の「長野県黒耀石原産地遺跡分布調査」の一環として行われるようになり、調査予定区域内は、ほとんどが草原か林地で表面採集による遺跡分布の確認が現況では不可能であったため、試掘を伴う分布調査として行うこととした。地形図および現地踏査による地形読取から遺跡立地を考慮した地点を選定し、試掘グリッドを設定し、掘り下げを行った。

2. 過去における調査

ジャコッバラ遺跡群に関するこれまでの調査の概要については、昨年度の分布予備調査概報にも略述されている。過去の表面採集による分布調査では、蛇行原遺跡および蛇行原上遺跡（ジャコッバラ No.1 遺跡）と、霧ヶ峰農場遺跡が周知されている。また、北側に隣接する、国の天然記念物である踊場湿原周辺には、旧石器時代を中心とする池のくるみA～D遺跡が知られていた。

ジャコッバラNo.1 遺跡では昭和62年に創価学会研修道場建設に先立つ緊急発掘調査が行われ、

新たに縄文時代の陥し穴状遺構14基が検出された。また、旧石器時代の石器類が調査区内およびその周辺から発見されたことにより、この遺跡の営まれた時代幅が大きく拡がることになった。

この調査の結果、遺構・遺物の出土状況や周辺地形を勘案した結果、従来「蛇行原遺跡」および「蛇行原上遺跡」として登録されていた範囲を含む部分が、「ジャコッパラ遺跡」として統一されることとなった。

平成3年度からは遺跡分布予備調査が開始され、平成4年度までの調査で、新たに約10カ所の遺跡が発見された。

これらは時間的・空間的に相互に有機的な関連を示すとみられ、全体的に一つの遺跡群として捉えることができるため、「ジャコッパラ遺跡群」として位置付けを行うこととした。「ジャコッパラ遺跡」を「ジャコッパラ No.1 遺跡」としたほか、その後新たに発見された各遺跡についても「ジャコッパラ No.○遺跡」という名称を用いることにした。

平成3年度および4年度の分布予備調査では、ジャコッパラ No.2～No.11遺跡が発見され、いずれも旧石器時代もしくは縄文時代に属する遺跡であることが明らかになっており、時代的に複合する遺跡の場合が多い。

これらの旧石器時代から縄文時代にわたる遺跡には、ジャコッパラ No.8 遺跡のようなかなり規模の大きい石器製作址や、ジャコッパラ No.6 遺跡のように縄文時代の陥し穴群が構築された狩猟場のほかに、一時的なキャンプ地と考えられる比較的小規模な遺跡など、様々な性格の遺跡がこの付近に分布していることがわかった。

旧石器時代に関しては、これまで諏訪地方で明確ではなかった、ローム層中の複数の文化層を層位的に区分できる可能性が高くなってきた。ジャコッパラ No.8 遺跡などでは、同一地点内での出土層位の異なる複数の石器群の存在が明らかになっている。

縄文時代では、諏訪地方では従来、八ヶ岳山麓周辺を中心に分布するとみられていた陥し穴群が、霧ヶ峰においても分布することが確実になり、霧ヶ峰のふもとの諏訪湖盆における縄文遺跡との関連が注意される。

3. 平成5年度調査の概要

調査方法は、地形図からの地形読み取りによって試掘グリッドの設定地点を決定し、各地点とも2m×2mを基本に、状況に応じて1m×2m、1m×3m等も設定した。掘り下げはすべて人力による手堀りで行った。

土層の確認は、ローム上面から数10cmまで掘り下げを原則としたが、遺物等の検出状況や、地山の状況に合わせて随時変更した。

本年度は、大きく分けて2地区において調査を行った。第一の調査対象地区は、踊場湿原の南

側に位置する斜面付近であり、第二の調査対象地区は、昨年度調査を行った独立丘(通称「中山」)から南側を下る尾根の末端部付近にかけてである。

踊場湿原の南側には、踊場湿原から南へ下る二筋の沢に挟まれた独立丘状のピークがあり、ここから伸びる尾根は、ジャコッバラNo.6遺跡およびジャコッバラNo.7・No.8遺跡へとつながっている。また、このピークから沢(市道)を隔てた西側の尾根筋は、ジャコッバラNo.2～No.5遺跡へと通じている。

本年度の調査は8月5日から開始したが、夏場は例年になく降雨の多い異常な気候であり、雨天のため、調査が中止されることもしばしばあった。

試掘グリッドは、独立丘状の尾根筋と斜面上半部分を中心に63ヶ所を設定したが、このうちKR B地区の踊場湿原に通じる谷筋の最奥部付近の数地点から、旧石器時代の石器類が発見され、これをジャコッバラ No.12遺跡とした。ジャコッバラ No.12遺跡の一部については、本年9月28日～11月8日の期間で別荘地開発事業に伴う道路建設に先立つ緊急調査を行った。

また、本年度調査区域北東端KR D地区の、踊場湿原への降り口付近でも遺物が検出されたが、これは踊場湿原の周縁に展開する池のくるみD遺跡の南側限界を示すものと考えられる。なお、今回の調査範囲となったKR B・KR D地区では陥し穴状遺構は見られなかった。

中山周辺(KR C地区)では、昨年度の状態とは異なり遺構・遺物の検出が認められなかった。

調査では遺物・遺構の確認とともに専門家の指導のもと、周辺地区の火山灰などの土壌データと比較すべく、適宜随所で土壌のサンプリングを行った。

補助事業決定の経過(抄)

平成5年5月20日付け5教社第20号

平成5年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書 市内遺跡発掘調査事業(国庫)

平成5年5月20日付け5教社第23号

平成5年度文化財補助金交付申請書 市内遺跡発掘調査事業(県費)

平成5年8月11日付け委保第71号

平成5年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知 市内遺跡発掘調査事業(国庫)

平成5年9月27日付け長野県教育委員会教育長指令5教文第2-30号

平成5年度文化財補助金交付決定通知 市内遺跡発掘調査事業(県費)

4. 調査組織

ジャコッバラ遺跡群調査団（平成5年度）

- 団長 吉田 守 （諏訪市教育委員会 教育長）
副団長 伊藤文彦 （諏訪市教育委員会 教育次長）
調査主幹 宮坂光昭 （諏訪市文化財専門審議委員・日本考古学協会会員）
調査員 五味裕史・青木正洋・田中 総（市教育委員会学芸員・長野県考古学会員）
調査団員 （一般）小松とよみ・関 喜子・原 敏江・両角南子・矢崎つな子・河内利義・小島良一・矢崎久之・宮坂茂子・増沢清久・石田恒富・小松保義・矢崎重司・矢崎市蔵・矢崎策郎（大学生）太田 努・茅野嘉雄

事務局

- 事務主幹 牛山 孝 （諏訪市教育委員会 社会教育課長）
事務局長 藤森恵吉 （諏訪市教育委員会 社会教育係長）
事務局員 有賀静江 （諏訪市教育委員会 社会教育係 平成5年9月30日まで）
高見俊樹・五味裕史・青木正洋・田中 総 （諏訪市教育委員会 社会教育係）
宮下香奈子（諏訪市教育委員会 社会教育係 平成5年10月1日から）

5. 調査日誌（抄）

- 8月5日 分布調査開始。KRB地区（市道西側）に機材搬入。6カ所の試掘グリッドを設定し、掘り下げを行う。KRB91グリッドおよびその周辺の漸移層からローム層中に黒曜石製石器類数十点が出土し、遺跡の存在が明らかとなる。
- 8月13日～18日 お盆のため現場休み。
- 8月20日 市教委事務局・県教委文化課・開発業者により現地協議。開発範囲に入る新しく発見された遺跡（ジャコッバラNo.12遺跡）について、原因者負担による記録保存のための発掘調査を行うこととする。
- 8月30日 KRB地区に続いて隣接するKRD地区（市道東側奥）の分布調査に入る。この日までにKRB地区では40カ所の試掘グリッドを設定。
- 9月1日 KRD10グリッドより黒曜石製石器が1点出土する。

- 9月6日 KRD21グリッドより黒曜石製の石器類に伴い、弥生土器片が出土する。
- 9月10日 試掘を行ったKRB～KRD地区の工事用道路予定地の随所において、重機による広範囲の表土剥ぎを行い、陥し穴状遺構の有無を確認する。9月20日にも実施。この日までにKRD地区では23カ所の試掘グリッドを設定する。
- 9月20日 KRC地区の調査に入る。機材の搬入を行い、5カ所のグリッドを設定する。
- 9月27日 KRC79グリッドのサンプリングを行う。明日よりジャコッパラNo.12遺跡の発掘調査に入るため、分布調査を一旦中止する。
- 9月28日 ジャコッパラNo.12遺跡緊急発掘調査開始（11月8日まで）。
- 11月10日 KRC地区の分布調査再開。
- 11月19日 信州大学酒井潤一教授来跡。KRC95グリッドで土壌サンプリングを行う。KRC地区の調査を終了させる。ここまでKRC地区では計30カ所の試掘グリッドを設定する。
- 11月22日 調査の補足としてKRB124グリッドの土壌サンプリングを行い、その後機材撤収。



KRC地区の調査スナップ

II章 位置と環境

1 ジャコッパラ遺跡群をとりまく環境

霧ヶ峰の地形と自然環境

霧ヶ峰は、標高1925mの車山を中心に噴出した溶岩が、南方へ緩やかに傾斜する火山体（盾状火山）により形成される。標高1400～1700mにある草原地帯には、八島ヶ原、車山、踊場の三つの高層湿原が展開し、それら湿原は、国の天然記念物に指定されている。このように草原と湿原からなる霧ヶ峰も、昭和の前半には、標高1400m以下まで、牧場や牧草地、植林地として入植がなされたが、現在では森林地帯になっている。通称ジャコッパラ（蛇行原）と呼ばれる付近でも、このように頻繁に土地利用がなされていた。

ジャコッパラ遺跡群と周辺の遺跡群

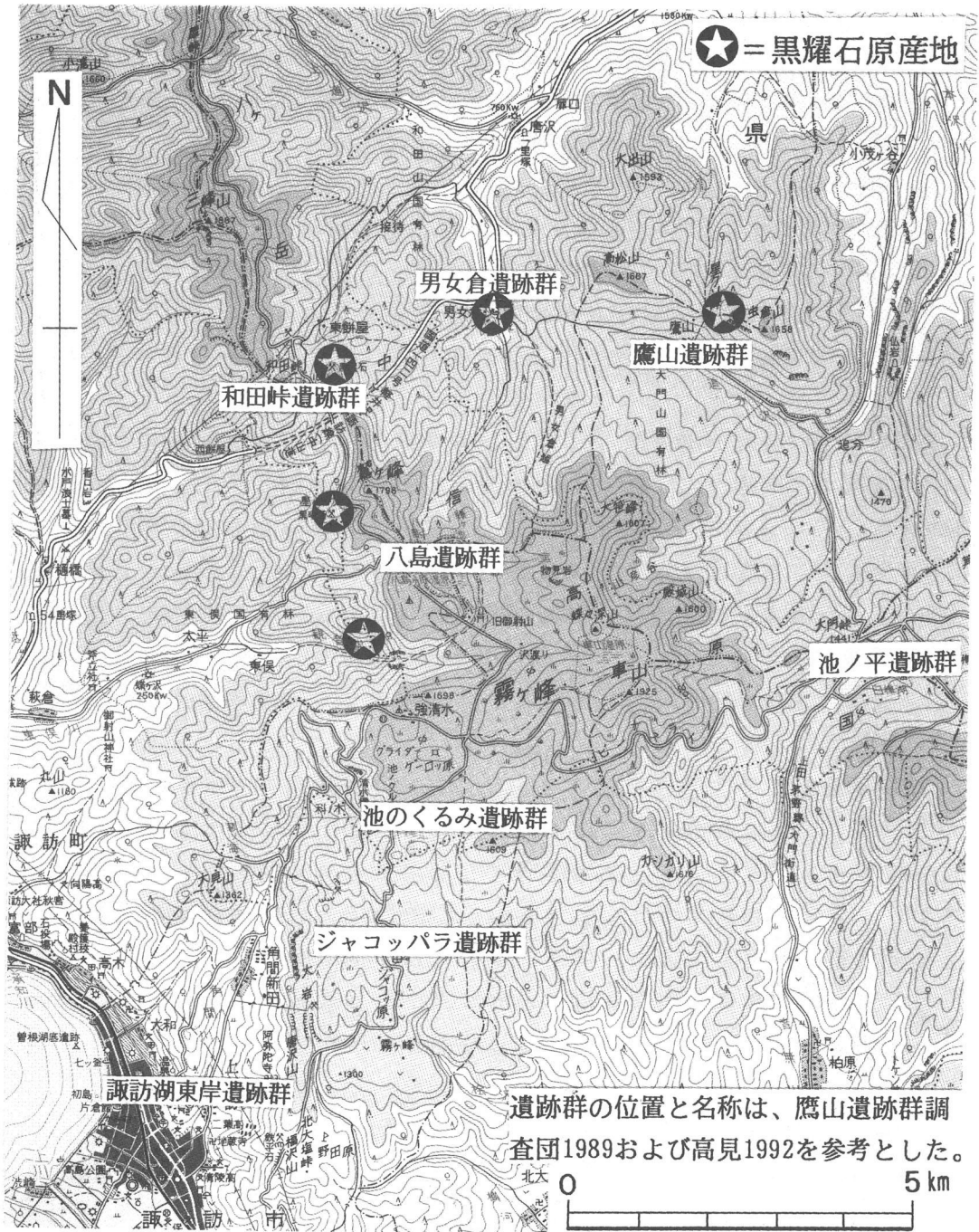
旧石器時代 霧ヶ峰の周辺には、かつての火山活動の産物である黒耀石の原産地が、多く見つかっている（第1図）。中でも和田峠周辺、鷲ヶ峰の星ヶ塔付近では、良質の黒耀石が採取できることが知られている。こうした黒耀石原産地の周辺では、後期旧石器時代を通じて、石器製作および居住のなされた遺跡が、数多く見つかっている。

これらの遺跡は、旧石器時代の遺跡としては、格段に規模が大きく、黒耀石製石器類を多量に生産した跡として残されている。また、遺跡は原産地直下に群在しており、このようなまとまりは遺跡群として、現在までにいくつか知られている（第1図）。

諏訪市域においては、星ヶ台そばの八島遺跡群（戸沢1958・1983）を除いて、黒耀石原産地直下に形成される遺跡群はなく、踊場湿原（池のくろみ）を取り囲むようにしてある池のくろみ遺跡群（金井・石井1971）や、今回調査対象となる霧ヶ峰の高原に、点々と遺跡の形成されるジャコッパラ遺跡群のように、黒耀石の産出地点より、やや距離をおいて分布する。また、諏訪湖付近では、諏訪湖を臨んで立地する茶臼山遺跡（藤森・戸沢1962）や、上ノ平遺跡（杉原1973）、北踊場遺跡（松沢1964）などの学史上重要な遺跡で構成される諏訪湖東岸遺跡群があり、この場合は、原産地から10km近くも離れてしまう。

これらの遺跡群の分布状況は、黒耀石原産地の多様な姿を反映しており、その立地条件は、遺跡（群）の構造を理解する意味で無視できない情報となろう。

遺跡群の年代も、充分そのデータが整備されている状況ではないが、始良Tn火山灰（AT）の降灰前から形成される遺跡が存在している。例えば、台形様石器、ナイフ形石器を主体とする



第1図 ジャコッパラ遺跡群と周辺の旧石器時代遺跡群

池のくるみC遺跡は、その特徴から立川ロームのVI層相当の古さが与えられている（佐藤1989）。また、最近調査されたジャコッパラNo.8遺跡（高見1992）も、これに準ずる古さを持つ石器群と解されるが、火山灰のデータからでは、十分に裏付けられなかった（河西1992）。

これらに後続する遺跡（群）には、雪不知遺跡（藤森・中村1964）や物見岩遺跡（金井1966）、

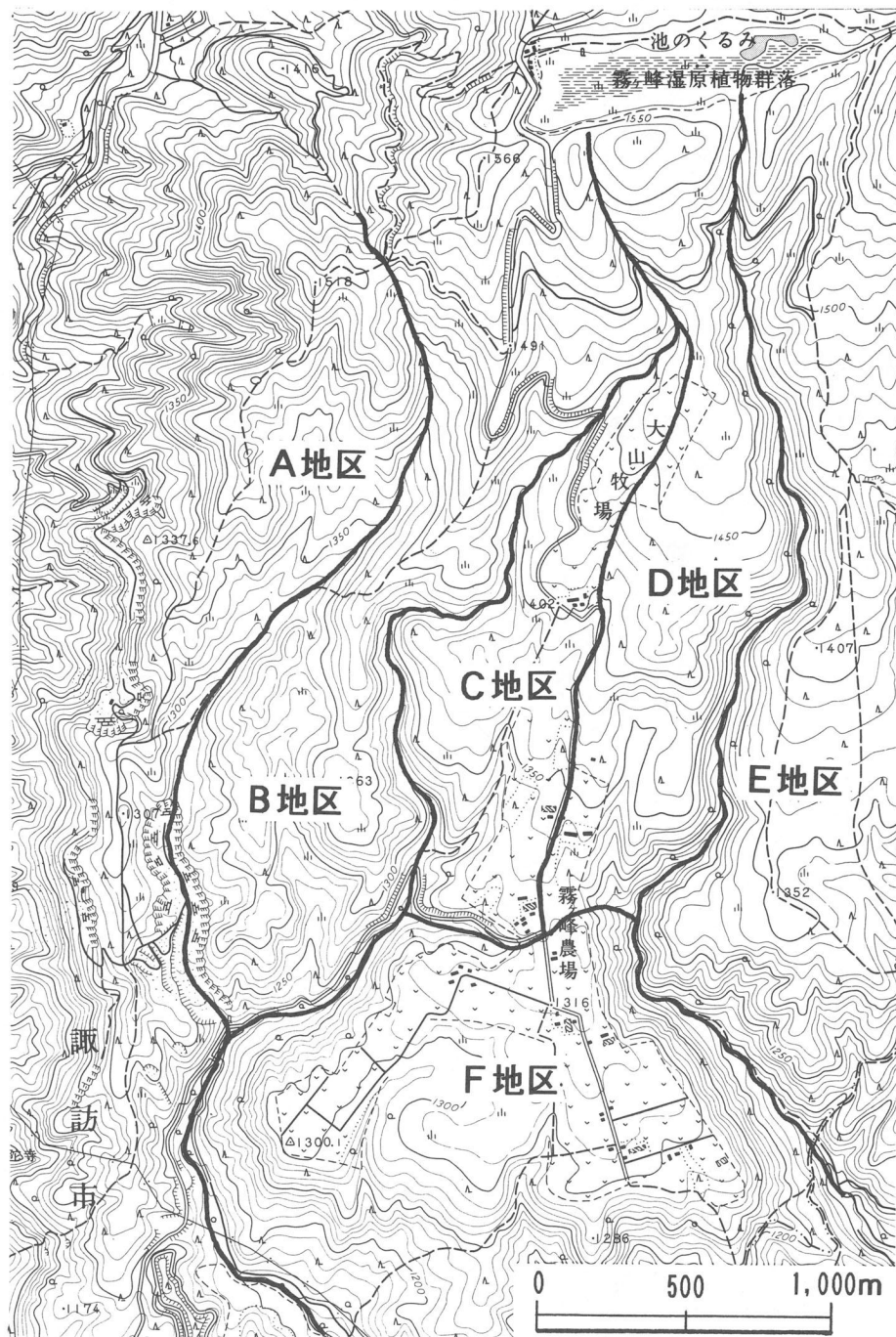
そして八島遺跡など、ナイフ形石器や、槍先形尖頭器を出土する遺跡で構成される八島遺跡群が相当する。特に八島遺跡は、黒耀石原産地遺跡群の中でも、石器生産量が増加する槍先形尖頭器が主体となる。男女倉遺跡群や鷹山遺跡群でも同じ様な内容を持つ遺跡があり、黒耀石原産地において尖頭器を生産する当該期の遺跡の特徴をあらわしている。

霧ヶ峰の遺跡群では、湿地のまわりに遺跡群が分布し、この分布傾向は、鷹山遺跡群や、もと湿地であった白樺湖にある池の平遺跡群にも共通する特徴であることが注意されている（大竹幸1989）。遺跡（群）の立地条件に、“水場”がかかわっていたことを暗示するものととれるが、こうした湿地が、山間部から平地に流れる小河川の源流にあたることも、この地に人間が集い、生活場所を設けた背景の要因であるようにも思われる。

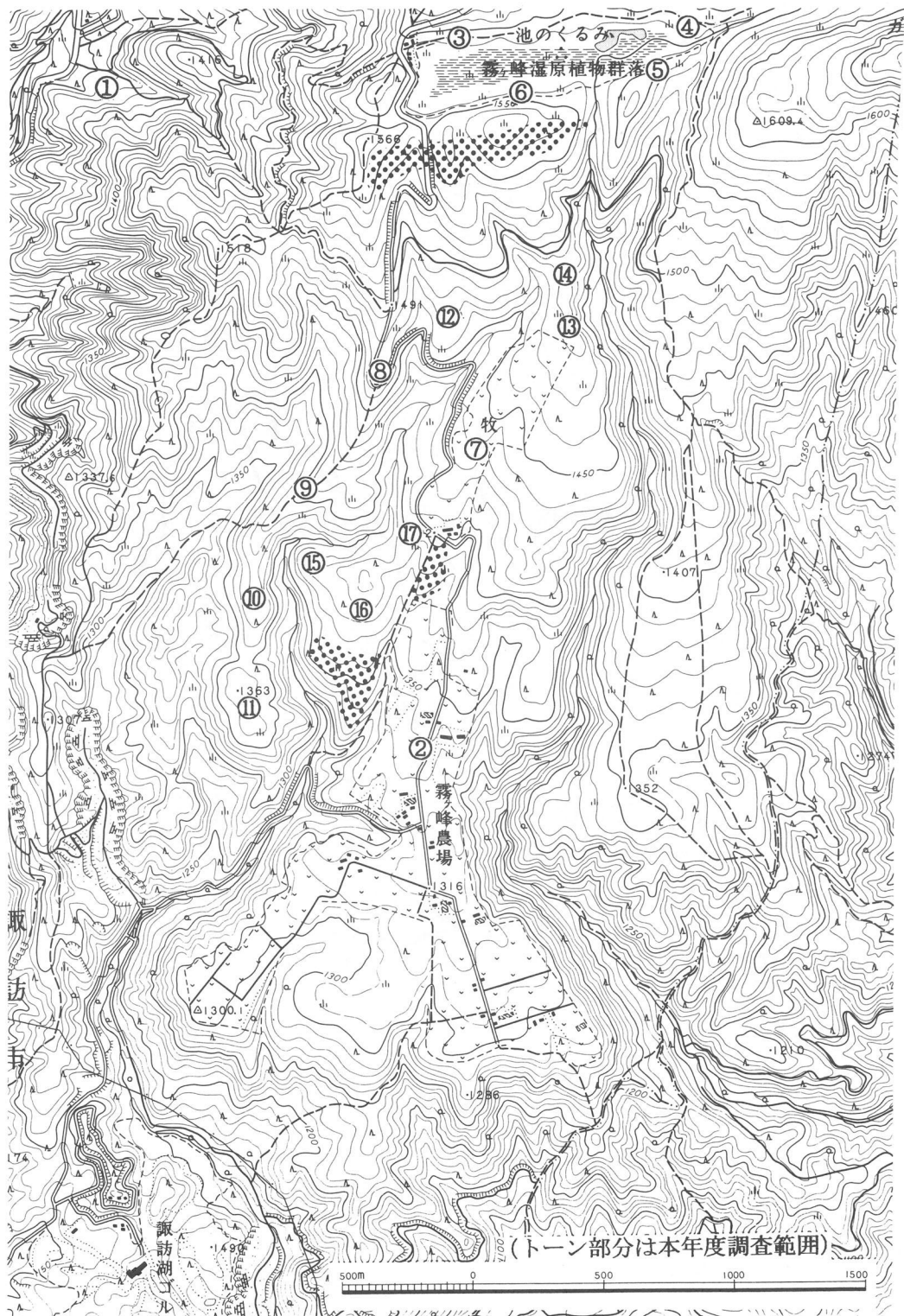
縄文時代 縄文時代における霧ヶ峰一帯は、土地の利用が、キャンプ地や狩猟場に限定されるようである。その証拠として、狩猟場の跡地と思われる沢沿いの緩斜面からは、陥し穴状遺構が発見されている。ジャコッパ遺跡群では、No.1・No.6・No.8の各遺跡から数基単位で陥し穴状遺構が発見され、広範囲の発掘調査を行ったNo.1遺跡では、14基の陥し穴状遺構が、一定の配列を保って、分布することが判明し、組織的な陥し穴狩の存在を裏付ける成果を得た（諏訪市教委1988）。今後、分布調査の進展によっては、さらに多く検出されると予想できる狩猟場の一形態である。この陥し穴狩の開始時期はさだかではないが、ジャコッパ遺跡群では、縄文前期頃には行われていたらしい。

黒耀石原産地としての縄文時代遺跡の分布は、旧石器時代遺跡に比べ、顕著ではない。そのかわり、黒耀石原産地で直接採取を行った痕跡として、“採掘”跡が星ヶ塔をはじめとして見つまっている。かつて、鳥居龍蔵氏が『諏訪史』の中で、星ヶ塔の黒耀石の産状を吟味し、そこに分布する窪みの跡を作業場または露営の跡とすることで、縄文時代の黒耀石採取の組織化を予見したことはよく知られている。そして、1958年、藤森栄一氏、中村竜雄氏により行われた星ヶ塔の調査では、切り通しに露呈した黒耀石採掘坑が発見され、窪みが黒耀石の採掘跡であることが確認された（藤森・中村1962）。最近では、長門町星ヶ塔付近での黒耀石採掘坑の存在（安蒜・小杉1993）が知られたのをはじめ、下諏訪町東俣からも採掘坑が発見されている（宮坂清1994）。

この盛んな黒耀石採取の状況を反映した遺跡は、ジャコッパ遺跡群内では見つかっていないが、角間川沿いの縄文時代遺跡に多量の黒耀石が集められた状況がうかがえるため、原産地から直接、ここまで運び込まれていたものと思われる。



第 2 図 調査区の区割り



第 3 図 平成 5 年度調査範囲と周辺の遺跡

地区	番号	遺跡名	所屬時期	市内番号	調査歴
地区外	①	細久保遺跡	縄文早・前期，弥生中期	409	昭和25・26年，一部発掘調査
C・D	②	霧ヶ峰農場遺跡	旧石器，縄文前期，中世	411	昭和54年，遺物採集により確認
調査	③	池のくるみA遺跡	旧石器，縄文早・前・中期，平安	412	
	④	池のくるみB遺跡	旧石器，縄文早期	413	
	⑤	池のくるみC遺跡	旧石器，縄文早期	414	昭和42年，一部発掘調査
地区外	⑥	池のくるみD遺跡	旧石器，縄文早・前期，平安	415	
C	⑦	ジャコッパラNo.1遺跡	旧石器，縄文前期？（陥し穴）	418	昭和62年，一部発掘調査
B	⑧	ジャコッパラNo.2遺跡	旧石器	431	平成元年，遺物採集により確認
B	⑨	ジャコッパラNo.3遺跡	旧石器，縄文？	432	平成3年，分布調査により発見
B	⑩	ジャコッパラNo.4遺跡	旧石器，縄文早期（陥し穴）	433	平成3年，分布調査により発見
B	⑪	ジャコッパラNo.5遺跡	旧石器	434	平成3年，分布調査により発見
B	⑫	ジャコッパラNo.6遺跡	旧石器，縄文？（陥し穴）	435	平成4年，分布調査により発見
D	⑬	ジャコッパラNo.7遺跡	縄文？	436	平成4年，分布調査により発見
D	⑭	ジャコッパラNo.8遺跡	旧石器，縄文？（陥し穴）	437	平成4年，一部発掘調査
C	⑮	ジャコッパラNo.9遺跡	縄文早期	438	平成4年，分布調査により発見
C	⑯	ジャコッパラNo.10遺跡	縄文早・中期	439	平成4年，分布調査により発見
C	⑰	ジャコッパラNo.11遺跡	縄文早期（陥し穴）	440	平成4年，分布調査により発見

（『諏訪市の遺跡』を基に作成）

第1表 周辺遺跡一覧表

2 ジャコッパラ遺跡と周辺遺跡の概要

調査地の地区割りについて

ジャコッパラ付近一帯で分布予備調査を行うにあたって、東西約3 km、南北約5 kmの範囲を、河川または谷の開析によって分岐される尾根筋、または台地ごとに地区割りをを行い、第2図のようにA～Fまでの地区を設定した。

現在までに分布予備調査が及んでいるのは、B地区、C地区、D地区の一部で、今後、これらの残りの部分および、A地区、E地区、F地区に調査を展開させる予定である。したがって、現在判明している遺跡の多くは、B地区、C地区、D地区に集中する結果となっている（第3図）が、平坦な尾根や台地が主になるD～F地区では、調査の進行により新たに遺跡が、多数発見される可能性を秘めている調査地区と言えよう。

発見された遺跡について

今回の調査地区外になるが、A地区の北西には縄文早期押型文土器の標式遺跡である細久保遺跡（第3図①）がある（松沢1957）。この細久保遺跡のある科ノ木地籍には、ハタ河原遺跡（中村1965）など、縄文早期～前期の遺跡がまとまっている。角間川流域は、上諏訪から霧ヶ峰に登る当時の行路の一つであったと考えられており（鶴飼1990）、これら遺跡の分布には、こうした立地条件に関連していたのであろう。

通称ジャコッパラ付近に分布する遺跡は、現在までに11遺跡が発見されており、ほとんどが旧石器時代から縄文時代に残されたものである（第3図・第1表）。第3図中⑧～⑫はB地区で発見された遺跡である。これにはNo.2遺跡からNo.6遺跡が当てはまり、No.6遺跡からは陥し穴状遺構も検出されている。C地区では、⑦・⑮～⑰が該当し、⑦のNo.1遺跡では多数の陥し穴状遺構が検出されている。D地区は部分的にしか調査が及んでいないため、遺跡分布の把握は進んでいないが、池のくるみ遺跡群（③～⑥）の直下にある⑭のNo.8遺跡遺跡からは、池のくるみC遺跡の石器群に関連する内容の石器群が、部分的な発掘調査により確認され、旧石器時代のジャコッパラ遺跡群と池のくるみ遺跡群を検討する上での好資料が得られた。幅の狭い尾根状にあり、周辺の旧石器遺跡とは異なる立地条件が注意され、縄文時代の陥し穴状遺構も見つかっている。

このようにジャコッパラ遺跡群は、溶岩台地という細長い尾根状の地形が、立地条件にかかわっており、縄文時代では、陥し穴状遺構の存在に示されるように、狩猟場など、その地形を活かした土地利用がなされているという特徴があげられる。

III章 平成5年度調査の概要と成果

1 KRC地区の調査

調査地区の地形的な特徴

KRC地区は南向きに傾斜する霧ヶ峰高原の樹枝状に延びる尾根の一つが該当する(第2図)。本年度調査したC地区の範囲は、市道をはさんだ尾根の先端があたり、昨年度以前調査のおよばなかった範囲が対象となった。

そのため調査地点は都合2ヶ所に別れ、1ヶ所は現在は溜沢となっているが、尾根の形成に関わったとみられる沢の上部の緩斜面が該当し、現状は灌木がまばらに生える草原となっている。もう1ヶ所は尾根の先端部で、かなり広い平坦面からやや急な斜面に変換する地点である。現状は山林となっており、この下方には小河川の流れる沢がある。尾根の平坦面からの比高差は約60mを測る。

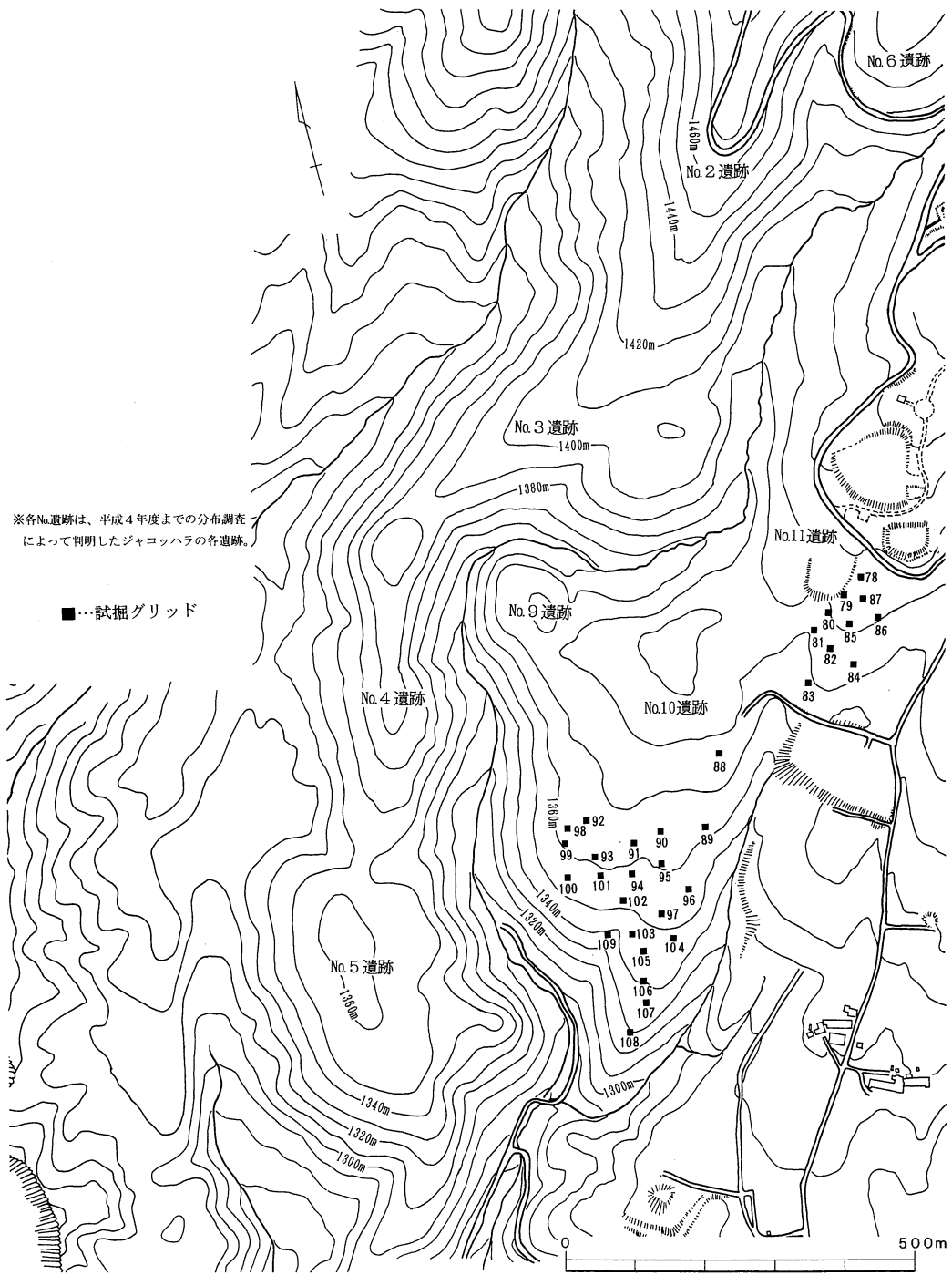
今回の調査範囲の北方には縄文早期～中期の遺物が発見されたジャコッパラNo.9～No.11の各遺跡の所在が知られている。また、隣接する尾根には旧石器時代に属する霧ヶ峰農場遺跡とジャコッパラNo.5遺跡が知られており、こうした状況をふまえながらそれら遺跡の広がりの確認および新たな遺跡の発見が分布調査の主眼となった。特に旧石器時代の遺跡の分布傾向を解明する観点からローム層の堆積状況の観察記録等も行った。

調査の方法と経過

分布調査の区域では現状において遺物の表面採集による遺跡の所在確認が難しいため、尾根上の平坦部など遺跡が立地する可能性の高い地形について、地形図および踏査に基づき、2m×2mを基本とする試掘グリッドを設定し、ハードローム層中におよぶまで遺物・遺構の有無を確認しながら人力による掘り下げを行った。

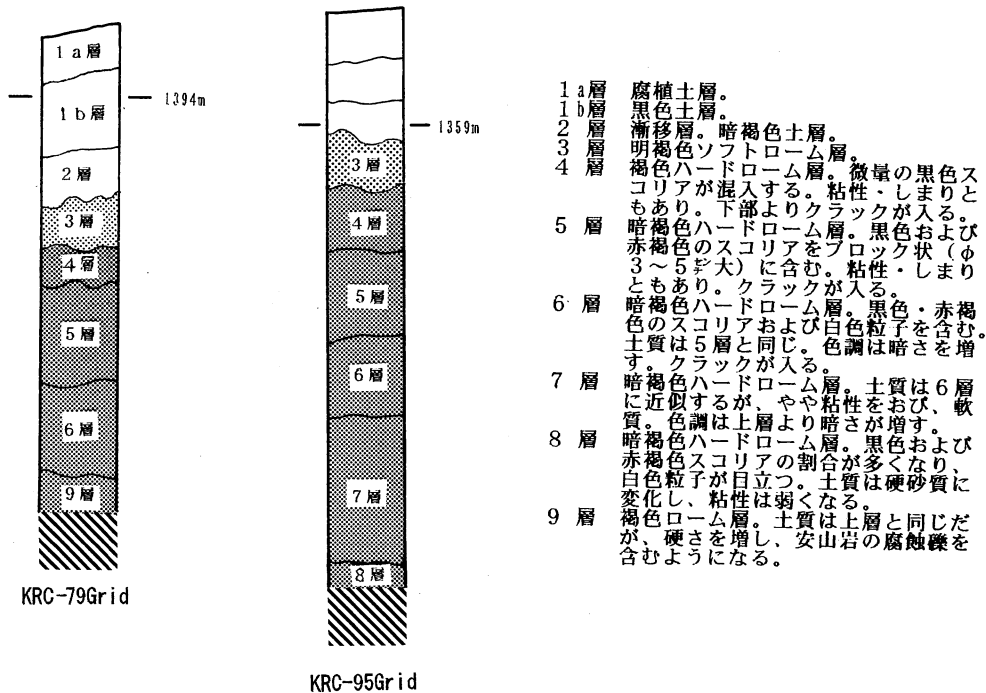
試掘グリッドはC地区内の2地点において、No.78～No.108の計30ヶ所を設定した(第4図)。

No.78～No.87グリッドを設定して調査を行った地点は、ジャコッパラNo.11遺跡の直下にあたるため、遺跡の広がりかどの範囲にまでおよぶかが注意された。また、No.88～No.108グリッドを設定した地点は、ジャコッパラNo.10遺跡の直下にあたり、同様にその範囲の広がりか注意された。これらの調査地点はいずれも尾根上地形における南向きの緩斜面であったことから、何らかの遺構が検出されることが予想された。



第4図 KRC地区の調査範囲（平成5年度）

しかし、調査の結果、各試掘グリッドからは遺物・遺構は認められず、このことから今回の調査地点は、ジャコッパラNo.10・No.11遺跡の範囲には含まれず、また新たな遺跡も存在しないことが確認されたのである。



第 5 図 KRC 地区の基本土層 (S=1/40)

土層の堆積状況について

各試掘グリッドでは層位的に遺構・遺物の有無を確認しながら掘り下げを行ったが、今回の調査範囲内のいずれのグリッドにおいても遺構・遺物は検出されなかった。また、旧石器時代関係の調査については、今までのジャコッパラ遺跡群における調査の結果を考慮し、ソフトローム層の下に堆積するハードローム層の上部付近まで掘り下げを行っている。

各調査地点における土層堆積の主な状況は第 5 図に示したとおりであるが、比較の概要をあらわすと、基本的な層順は表土に関連する黒色の腐食土層下に暗褐色の土層 (2 層) があり、明褐色のソフトローム層 (3 層) に移行し、以下はハードローム層となる。各調査地点の試掘グリッドに共通することとして、近隣のジャコッパラの各遺跡において縄文時代の遺物が包含されることの多かった 2 層の堆積に厚みがなく、またソフトローム層もこれに準じて堆積が薄いという特徴が認められた。立地条件に制約されることとは思われるが、縄文期の遺物・遺構が確認されなかった理由の一つに、この包含層の発達が乏しかったためという見方が許されるかも知れない。

ソフトローム層とハードローム層との堆積は極めて不整合的であり、層の境には目立った凹凸はなくフラットである。一方、分層された各ハードローム層の累重は整合的で地点間の差異は色調等の違いに留まる程度で、粘性に富み、クラックの入りやすい共通の特徴が認められる。そして下部におよぶにしたがい、安山岩起源と考えられる砂粒が多く含まれるようになり、掘り下げた最下部にあたる 9 層では硬砂質を呈するようになる。これは山体の基盤層に近づいている傾向

として解釈できよう。

調査結果について

C地区における今回の調査範囲では遺物・遺構等の検出は認められなかったが、以前に確認されていたジャコッパラNo.10・No.11遺跡の範囲を大まかに確認する意味では成果があったと言える。しかし、2層以下のローム層の堆積状況が地点間を通して安定している事を考慮すると、調査範囲内に旧石器時代の遺物包含層が残されている可能性も捨て切れない。土層サンプリングも行っているため、今後はAT層などローム層の古さを把握し得る火山灰層の検出により、ジャコッパラの各遺跡との比較を試みたい。

2 KRB・KRD地区の調査

調査地区の地形的な特徴

KRB・KRD地区の本年度における調査範囲は、国の特別天然記念物である踊場湿原（池のくるみ）の南側に接する尾根の基部が該当する（第6図）。

踊場湿原の周辺からは過去の発掘調査や分布調査では、大きく4つの地点から旧石器・縄文時代を中心に平安時代までの遺物が発見されており、これら4地点の遺跡を「池のくるみ遺跡群」として、A遺跡～D遺跡に分けて扱っている（諏訪史教育委員会1983、高見1992b）。

金井典美氏等によって調査され、台形様石器の発見により諏訪地方でも後期旧石器時代の古い段階に位置づけられている「池のくるみ遺跡」は、第6図中における池のくるみC遺跡が該当する。この池のくるみC遺跡からは縄文時代草創期の爪形文土器や早期の土器類が発見されており、霧ヶ峰高原の縄文遺跡でも最古の遺跡としてみられている。また、池のくるみC遺跡が接する車山から踊場湿原に流れ込むイモリ沢（檜沢川の源流）の上流にはイモリ沢上遺跡があり、ここからも旧石器時代の石器類が採取されている。さらにその沢筋の上流にある蝶々深山および車山湿原付近一帯には数地点の遺跡から構成される旧石器時代遺跡群の存在も知られている。

この車山湿原付近の遺跡群については遺物の表面採集による確認しかなく、詳細については不明な点が多い。しかし、その立地は池のくるみ遺跡群や八島ヶ原湿原周辺の遺跡群（八島遺跡群）と共通しており旧石器時代遺跡群として確立される可能性を秘めている。

池のくるみC遺跡直下のイモリ沢は、その流れが湿原を出たところで檜沢川となり、霧ヶ峰山中を南に向かって流れ、やがて霧ヶ峰南麓の茅野市米沢方面へ及ぶ。池のくるみC遺跡より800mほど離れた檜沢川の上流付近のKRD地区の尾根上にはジャコッパラNo.8遺跡が発見されている（高見1992a）。ここでは台形様石器をはじめとしてAT下石器群の特徴を持つ石器群のブロック

がローム層中に検出され、ジャコッパラ遺跡群が池のくみ遺跡と時期的に関連する可能性を初めて示した。

今回の調査範囲は池のくみ遺跡群とジャコッパラ遺跡群の接触部分にあたり、ジャコッパラNo.8遺跡に関連する新たな旧石器時代遺跡の発見と、発掘調査歴がなく実態の不明瞭な池のくみD遺跡の性格と範囲の広がりを確認することが重要な視点となった。とりわけKRD地区の調査範囲は池のくみD遺跡の範囲より数十m離れた所にあり、丘陵頂部をはさんだ南側傾斜面という点で立地は異なるものの、関連遺物ならびに関連遺構発見の期待があった。

本調査範囲の直下におけるジャコッパラNo.1・No.6・No.8の各遺跡では縄文時代の狩猟に用いられた陥し穴状遺構が数基単位で発見されている。これらは沢ぞいの急峻な斜面、または浅い沢もしくは窪地状の地形に面する傾斜地に構築されており、本調査範囲が縄文期におけるこうした狩猟活動の範囲に含まれるかということも留意点となった。

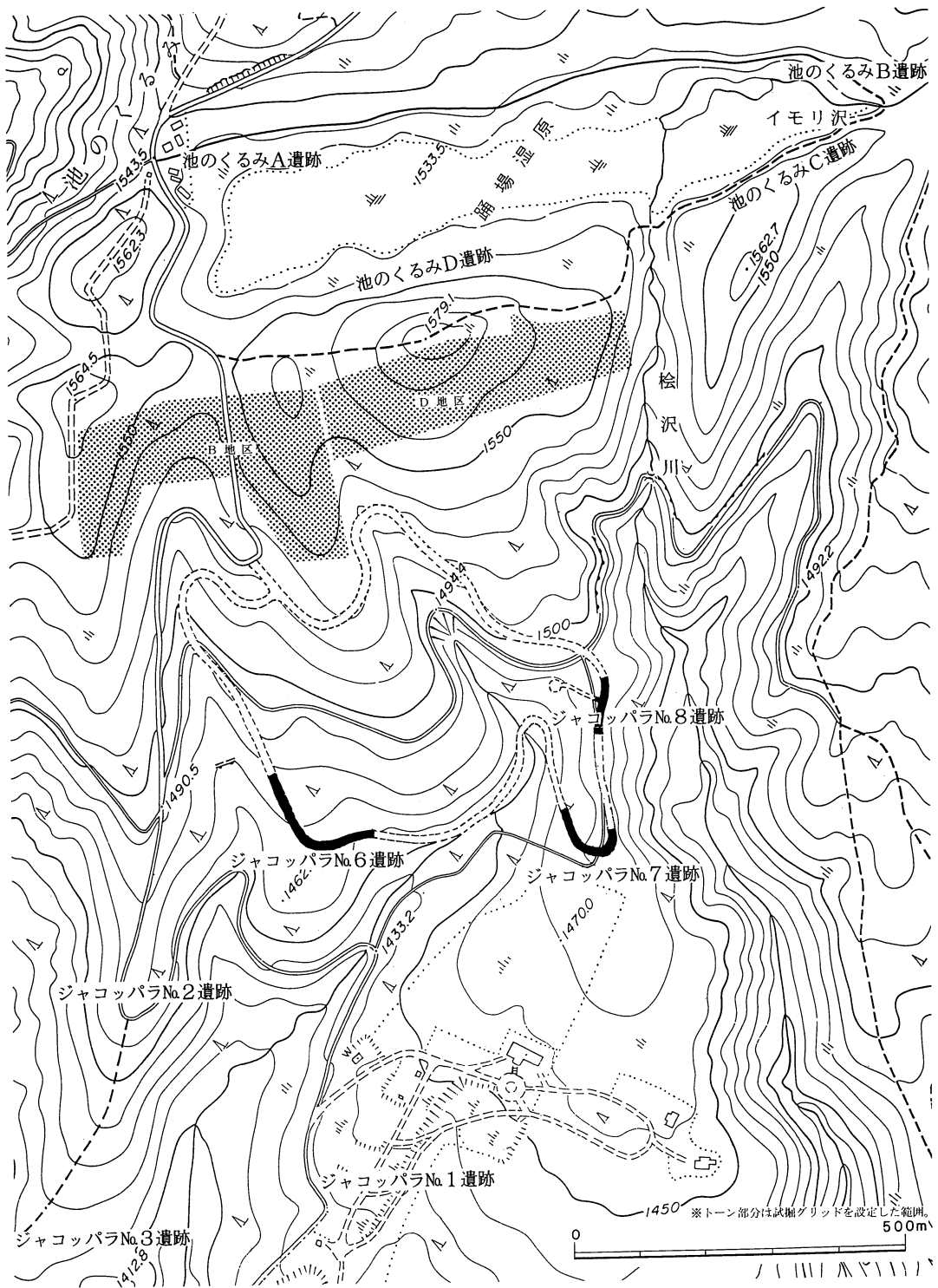
第6図のように調査範囲は霧ヶ峰において6ヶ所に分けた調査区内、KRB地区およびKRD地区の主要な尾根筋の基部にあたり、KRB地区では標高1566mを最高点に、現市道辺りを鞍部に持つ踊場湿原に隣接する付近が範囲となり、KRD地区は市道より東側にある尾根をKRB地区との境として、踊場湿原の南側にみられる檜沢川までを範囲とした尾根の基部となる独立丘陵状部分があたる。これら地点は、かつては踊場湿原の周辺と同様、灌木の生える草原地帯であったが、一帯が戦後植林された結果、現在は山林化している。

調査の方法と経過

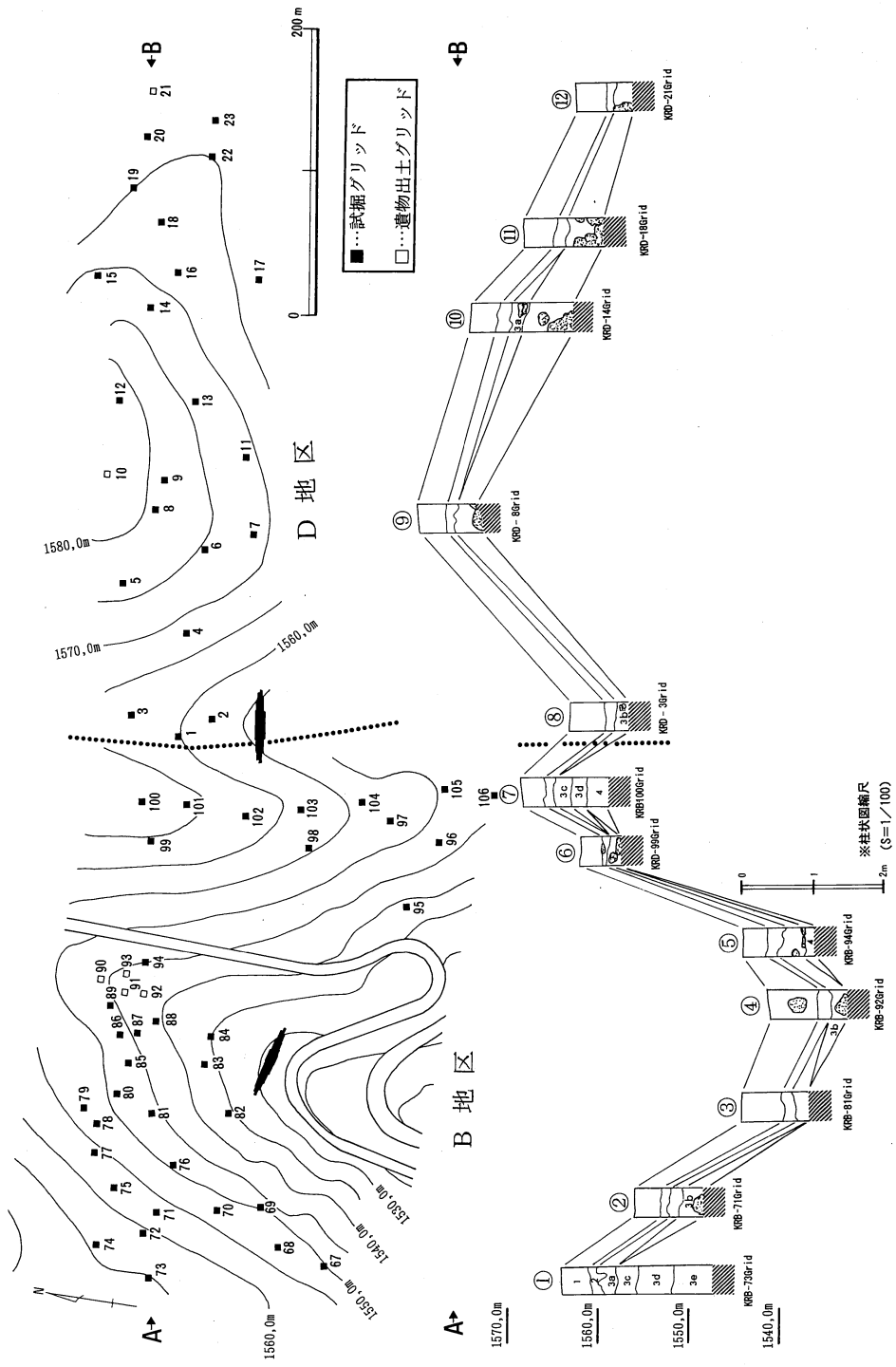
KRC地区の調査と同様、現状において遺物の表面採集の可能性が低いため、尾根上の平坦部など遺跡立地条件を考慮して2×2mの試掘グリッドを設定した。また、陥し穴状遺構の存在も考えられたため、斜面上には任意に1×3mの陥し穴検出を目的とした試掘グリッドを設定した。今回の調査範囲内では工事用道路の予定地として伐採が行われていたため、このルート上を一つの目安としてグリッド設定がなされた。

なお、試掘に先立ちKRB・KRDの調査範囲内を巡検した際、KRB地区の市道脇の傾斜地から石鏃を、踊場湿原の西端から開析する沢の下方に建築されていた砂防ダム周辺で旧石器時代に属するとみられる黒曜石製石核1点を表面採集した。また、KRB・KRD地区内では5cm大から小豆大までの黒曜石原石を3点表面採集した。このことから石核の採集されたKRB地区の沢については旧石器時代に属する遺跡の存在が予測され、これら遺物の採集された地点にもグリッドが設定された。

第7図にみるとおりKRB地区に40ヶ所、KRD地区には23ヶ所、計63ヶ所の試掘グリッドが設定され、掘り下げが行われた。なお試掘調査後、工事予定地にかかる傾斜地の随所では、さらに重機によりローム層上面まで掘り下げが行なわれ、陥し穴状遺構の有無を確かめた(写真)。



第 6 図 KRB・D地区の調査範囲 (平成 5 年度)



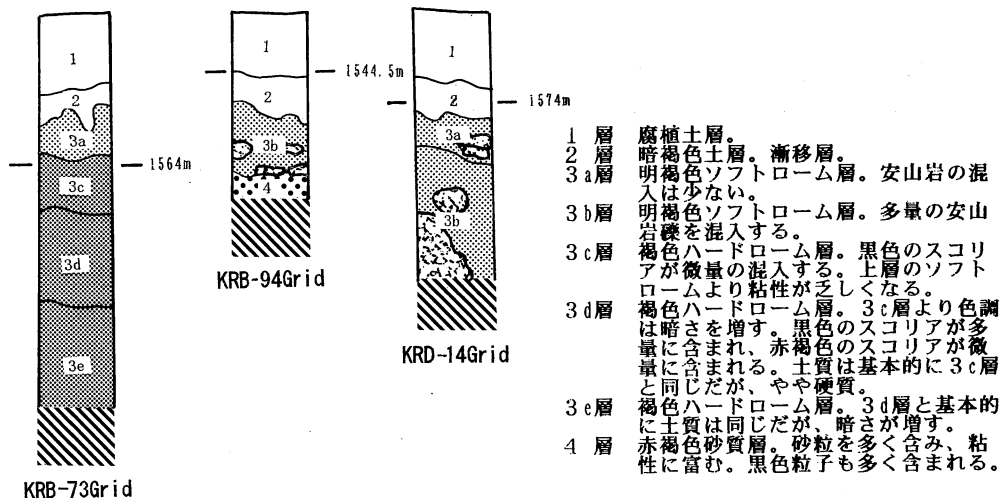
第 7 図 試掘グリッドの配置と土層堆積状況



重機による遺構確認のための表土剥ぎ作業（K R B 地区）



陥し穴状遺構確認作業（K R B 地区）



第 8 図 KRB・D地区の基本土層 (S=1/40)

土層の堆積状況について

調査区は踊場湿原に沿った南北約850mの範囲が該当し、標高1530m～1580mの範囲となる。先にも触れたように、小丘状を呈する尾根地形とその間に開析する沢状地形が基本となり、尾根の形成に伴う沢の開析作用は、土砂崩落や山体の基盤となる安山岩の地表への供給を促進させる契機となったものと考えられ、各地点ごとの土層堆積は複雑さを呈している。

基本土層の観察については、KRB地区の標高の高い地点を除いては、ローム層中に安山岩の大きな礫塊が密に混入している事が多く、ほとんどの場合、人力による狭い試掘グリッドでは礫塊を除去しての掘り下げが困難であったため、ソフトローム層中までか、いわゆるハードローム層の上部付近までしか掘り下げることができなかった。したがって、各地点ごとの土層堆積の対比は十分に行えなかった点があるが、観察の結果、第8図に示したような土層堆積の基本的な堆積状況を知ることができた。

1層は表土となる黒色腐植土層であり、堆積状況の良好な地点によっては下部が褐色味を帯び、表土と分離できた場合もあった。2層はローム層と黒色土の漸移層である。

3 a層以下はローム層となるが、3 a・3 bとした層はいわゆるソフトロームに比定され、とくに3 b層では大きな安山岩の礫が多量に含まれる。またKRB73グリッドのように礫の混入しない地点では3 a層のみが確認されたこともあった。

3 c～3 e層はハードロームに比定され、KRB・KRDにおける今回の調査範囲では、土層中に礫を含まないKRB73グリッドの周辺およびKRB100～106グリッドが設定された尾根上等に安定して堆積する状況が確認できた。なおソフトロームとハードロームの境は不整合的であり、明確に分層される。

4層は後でも触れるが、調査範囲内ではKRB地区に堆積が限られた土層であり、KRB地区とKRD地区の境にあたる尾根頂部からの市道沿いの斜面部にかけて堆積が認められた。土層の特徴は赤褐色を呈した砂質粘土層であり、赤化の原因には酸化鉄の影響が考えられる。この4層については3b層とした安山岩礫を多量に含むソフトロームの直下に堆積する例(KRB94グリッド等)と3d層などハードローム層の直下に堆積する例(KRB100グリッド等)があり、正確な層序は今回の調査では確認できなかった。堆積時期は可能性としては、土石流とともに堆積したとみられる3a・3b層の形成以前であることは疑いないところであり、砂質粘土という性質上、水の影響により土中で赤化が進行した可能性も指摘できよう。

第7図に調査区の各尾根を南北に横断するかたちで柱状図を示した。調査範囲内で最西端となる①では安山岩礫の混入はないが、標高の下がる②からは安山岩礫を多量に含む3b層が現れ、沢底となる④から⑥にかけての斜面部では3b層が続く。尾根の頂部となる⑦では3b層が途絶えるが、⑧の沢をはさんで再び安山岩礫を含む3b層が認められるようになり、これが東端の12まで続くようになる。

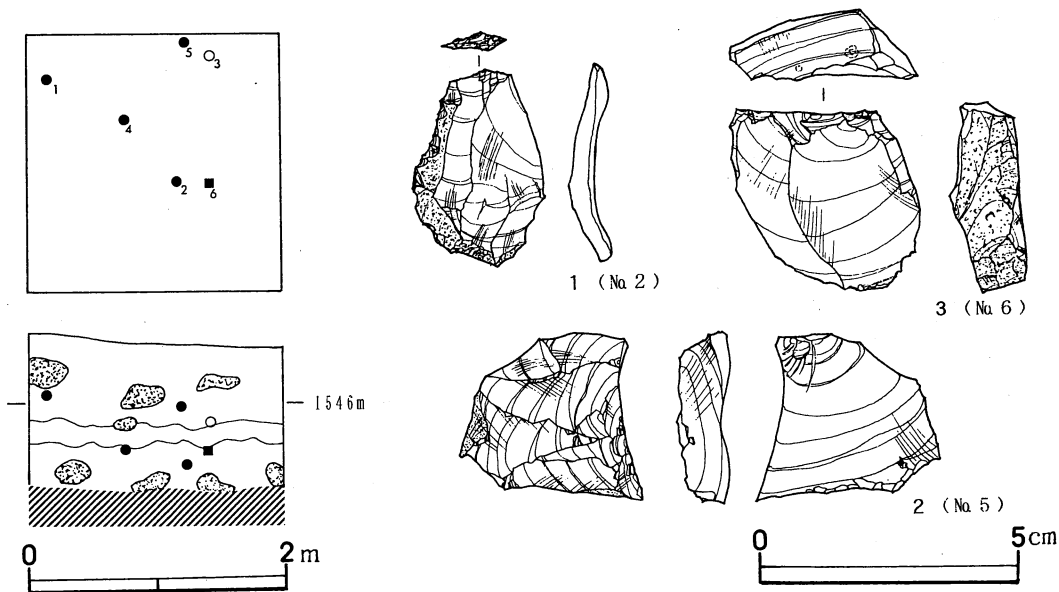
このようにローム層中における安山岩礫の分布状況は、尾根単位で変化する様子がうかがわれ、安山岩礫の供給は尾根頂部から外れた、斜面部などの沢地形に流れ込む傾向が観て取れる。これはソフトロームとした3a・3b層が堆積後移動したか、土石流のように地表面を移動して堆積した状況を示すものといえる。ソフトローム層中における安山岩礫は検出状況においては亜角礫が多かったものの、盤状のものも認められ、これらはあたかも地表を滑ってきたかのように傾斜に沿って平坦面を保持するものが多かった。またソフトロームとハードロームとの境が明確に分層できること、すなわち堆積状況が不整合的であることもソフトロームの移動性を裏づけるものとして解釈したい。

したがって今回の調査範囲では、ソフトローム層中、もしくはハードローム層上部における遺物については、原位置が失われている可能性を考慮して調査を進める必要があったわけである。そして、試掘調査ではKRB・KRD両地区の6ヶ所のグリッドから黒耀石製の石器類を中心とした遺物が発見され、そのうちの1ヶ所からは、この霧ヶ峰高原の遺跡では珍しい弥生土器が発見された。

遺物の出土状況と出土した遺物について

KRB地区ではNo.90～93の4グリッドにおいて、安山岩礫混じりのソフトローム層である3層を中心に黒耀石製の石器類が発見された。この4ヶ所のグリッドは市道に隣接した沢状地形に集中しており、後日、この範囲を新発見の旧石器時代遺跡として扱うことになった。

KRD地区ではNo.10とNo.21の2グリッドから遺物が出土し、当該調査範囲の東端にあたるNo.21グリッドからは弥生土器の小破片が発見された。



第 9 図 KRB90グリッドの遺物出土状況と出土石器

以下、KRB90グリッドから各グリッド番号単位で遺物の出土状況とその遺物の特徴について記載を行ないたい。

KRB90グリッド (第 9 図)

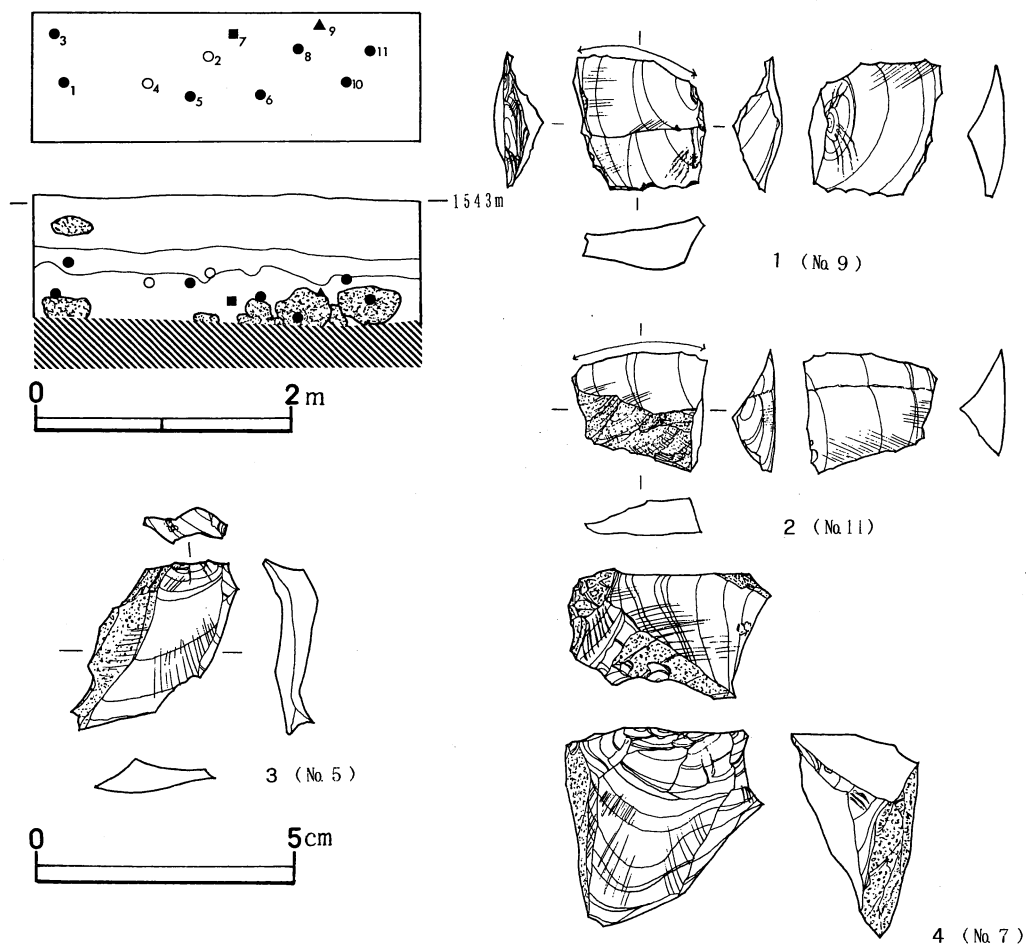
【グリッドの位置】グリッドは踊場湿原の西端から南に向かって開析する沢の中に位置し、地表の標高は約1546mを測る。

【層 序】1層以下、2層、3b層の層序が認められ、1層中より安山岩礫の混入が著しく、3b層の下部では礫が密集し、これ以下の土層については人力での掘り下げは不可能であったため、掘り下げを中断している。

【遺物の出土状況】遺物の出土層位は1層の下部から3b層上部付近におよぶ。

【出土遺物】6点が出土し、すべて黒曜石製の石器類であり、旧石器時代に属するものとみられる。内訳は剥片が4点、碎片が1点、石核が1点である。

第9図1は打面調整を持つ剥片であり、表面には礫面と裏面の剥離方向と同じ剥離面がみられる。2は幅広な剥片である。表面には裏面の剥離方向と90°異なる複数の剥離面が認められるが、これは剥離される直前の石核の作業面に当たるものである。右側縁には表面の剥離作業の際の打面がみられる。おそらくは一連の剥片生産作業のなかで作出された剥片とみるよりも、打面の転移に伴う新たな打面を設置するため剥離された剥片とみたほうが良いのかも知れない。3は石核である。背面には自然面がみられ単設打面である。なお打面にはパンチ痕が認められる。



第10図 KRB91グリッドの遺物出土状況と出土石器

KRB91グリッド (第10図)

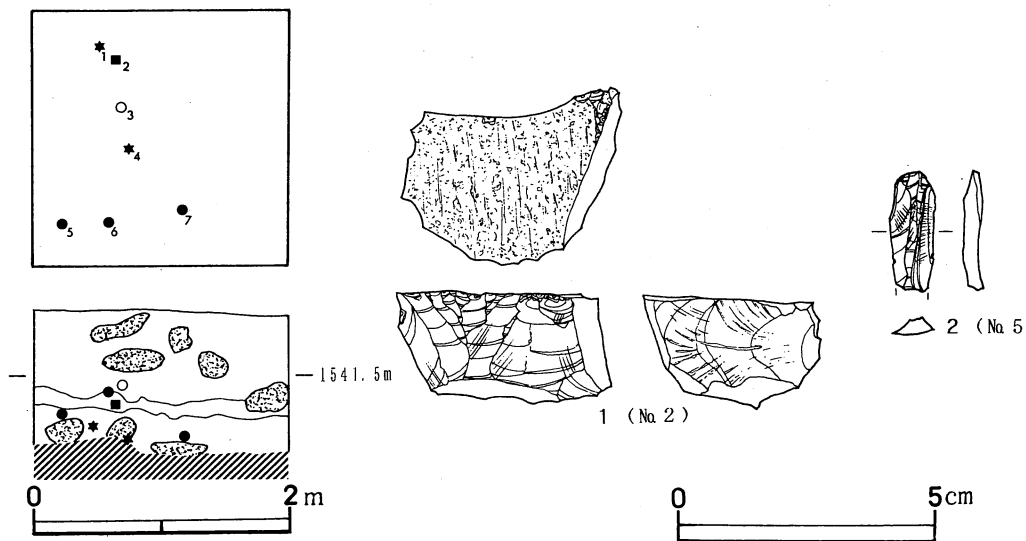
【グリッドの位置】 KRB90と同じ沢の中に位置し、地表の標高は約1543mを測る。

【層序】 基本的な土層堆積はKRB90と同じである。ここでも3b層は安山岩礫が密集するため、完全な掘り下げが行えなかった。

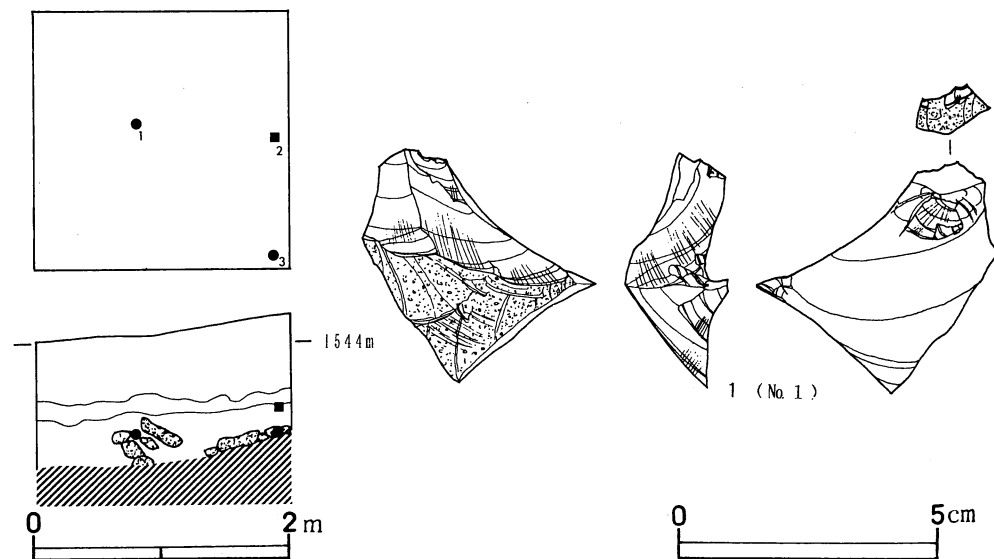
【遺物の出土状況】 遺物の出土層位は2層から3b層におよぶ。

【出土遺物】 11点が出土し、すべて黒耀石製の石器類であり、旧石器時代に属するものとみられる。内訳は二次加工のある剥片が1点、使用痕のある剥片が1点、剥片が6点、碎片が2点、石核が1点である。

第10図1は二次加工のある剥片で、剥片の端部を折取り、その面に対し複数の加工を行い側辺を形成する。反対の側辺は打面となる。剥片の側縁には使用痕とみられる微細な剝離痕が認められる。2は使用痕のある剥片で、打面にあたる剥片頭部が折取られたためか欠損している。剥片



第 11 図 KR B92グリッドの遺物出土状況と出土石器



第 12 図 KR B93グリッドの遺物出土状況と出土石器

の側縁には微細な剝離痕が認められる。3は剥片で表面には自然面がみられる。4は石核で背面と打面に自然面があり、角礫状の黒耀石を用いたものとみられる。

KR B92グリッド (第11図)

【グリッドの位置】KR B90・91と同じ沢の中に位置し、地表の標高は約1542mを測る。

【層 序】基本的な土層堆積はKR B90と同じである。ここでも安山岩礫の混入は著しく、3 b

層は礫が密集するため、完全に掘り下げが行なえなかった。

【遺物の出土状況】 遺物の出土層位は1層下部から3b層におよぶ。

【出土遺物】 7点が出土し、そのうち5点は黒曜石製石器類である。内訳は剥片3点、碎片1点、石核1点、黒曜石原石2点である。出土層位からほとんどが旧石器時代に属するものとみられる。

第11図1は石核である。打面は平坦な自然面を利用している。被熱により内部が発泡し、細かなひび割れが入っている。2は小形の縦長剥片であり、末端は欠損している。原石は1g以下のものであり、いずれも小豆大ほどの小粒なものである。

KRB93グリッド (第12図)

【グリッドの位置】 KRB90～92と同じ沢の中に位置し、地表の標高は約1544mを測る。

【層 序】 基本的な土層堆積はKRB90と同じである。3b層は安山岩礫の混入が著しく、完全に掘り下げができなかった。

【遺物の出土状況】 遺物の出土層位は3b層中である。

【出土遺物】 3点が出土し、いずれも黒曜石製の石器類である。内訳は剥片2点、石核1点である。出土層位からすべて旧石器時代に属するものとみられる。なお図示しなかったが石核は、親指大ほどの小形のもので、破碎した石核の一部の可能性もある。

第12図1は剥片で尾部はやや厚みを持つ。表面には打面側からの複数の剥離面と自然面がみられる。右側面には打面側の剥離と方向の異なる剥離痕がみられるが、原石段階で粗割りされた際の痕跡と考えられる。打面は平坦な自然面がみられ、調整は行われていない。

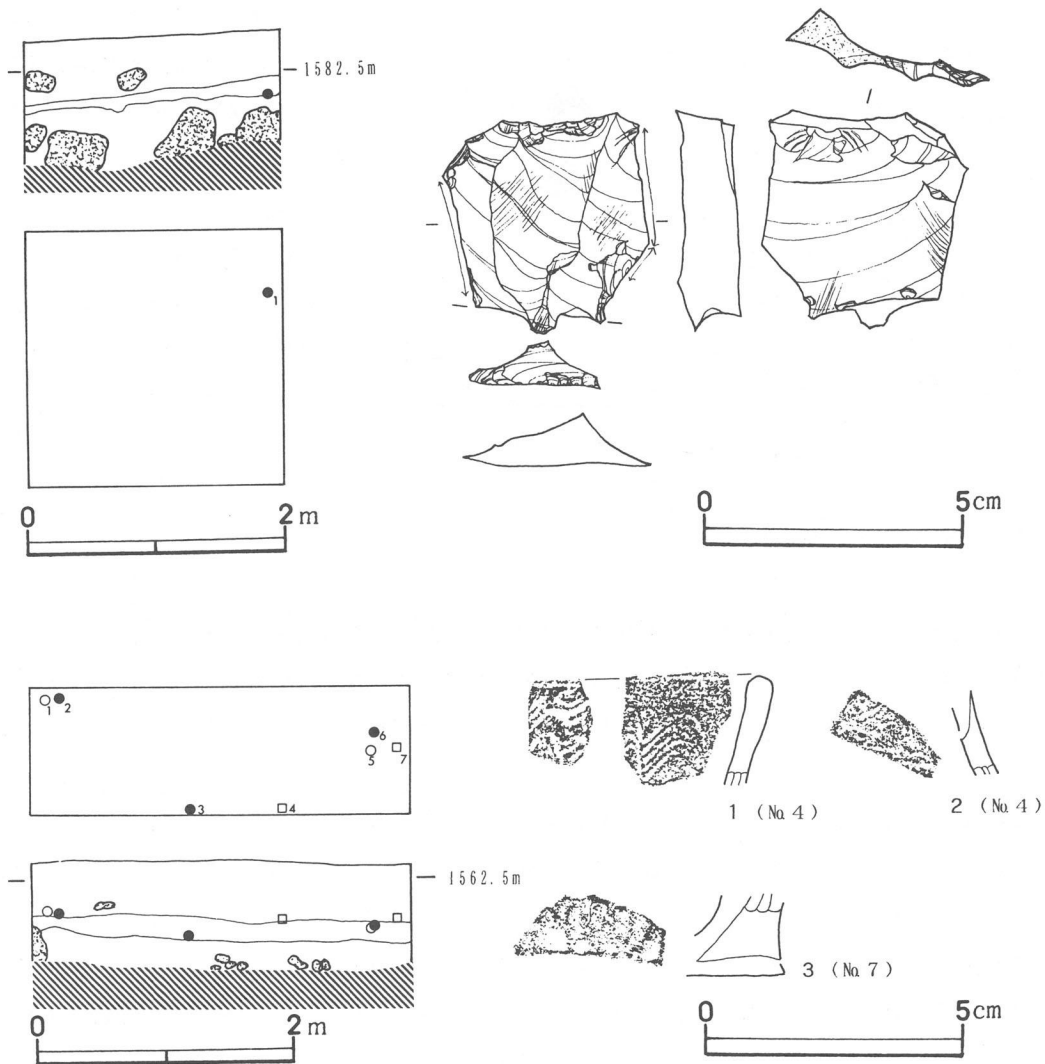
KRD10グリッド (第13図)

【グリッドの位置】 踊場湿原の南側で丘陵状を呈する尾根の頂部に位置し、地表の標高は約1582.5mを測る。

【層 序】 上層から1層、2層、3b層の層序となる。1層は安定した堆積を示すが、2層は薄く、堆積状況は安定していない。なお3b層中には安山岩礫が多数混入するため、完全に掘り下げができなかった。

【遺物の出土状況】 遺物の出土層位は2層である。

【出土遺物】 黒曜石製石器が1点出土した。末端部に折れ面を持つ幅の広い剥片で、表面には打面方向からの連続した複数の剥片剥離の痕跡が認められる。両側辺には使用痕とみられる微細な剥離痕が観察でき、打面には一部平坦な自然面が残る。鋭い縁辺を利用した不定形石器とみられる。



第14図 KRD21グリッドの遺物出土状況と出土土器

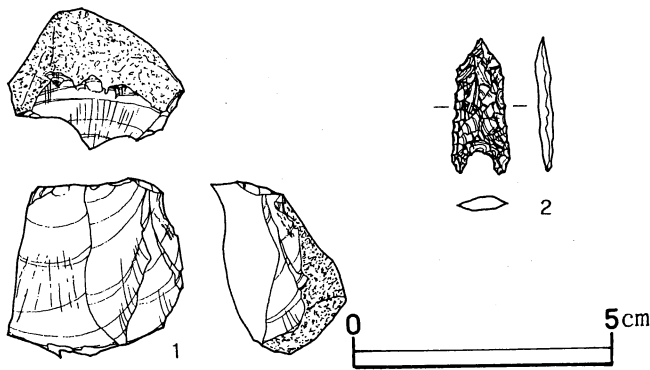
KRD21グリッド (第14図)

【グリッドの位置】 今回の調査区的最東端で、檜沢川への落ち際の平坦面に位置する。地表の標高は約1562.5mを測る。

【層 序】 上層から1層、2層、3b層の層序となる。3b層中には安山岩礫が多数混入する。

【遺物の出土状況】 遺物の出土層位は1層下部から2層上部におよぶ。

【出土遺物】 9点が出土し、内訳は同一個体とみられる弥生土器片が4点、黒耀石製剥片が3点、黒耀石製破片が2点である。なお破片のうち1点は石核が破碎した際生じたものとみられる。



第15図 KRB地区採集の石器

表面採集の遺物（第15図）

今回の調査範囲で表面採集された遺物は、黒耀石原石および黒耀石製の石器類が総数5点採集されたのみである。このうち石器類は石核と石鏃のみで、残り3点は原石となる。原石の重量は0.8g、2.5g、30.4gを計り、このうち最大重量の原石は板状を呈し、その他のものは小豆程度の小粒なサイズである。

第15図1は黒耀石製の石核である。KRB地区で、踊場湿原の西端から南に向かって開析する沢の標高1530mあたりに造られた砂防グムのそばで採集されたものである。背面には自然面が残り、やや丸みを帯びた角礫を利用したことがうかがえる。KRB90グリッドから出土した石核（第9図3）の特徴と同じであり、旧石器時代のものとみて良いだろう。

2は黒耀石製の石鏃でKRB地区の市道沿いの斜面で採集された。凹基無茎鏃で先端部は鈍角に作られ、全体に薄く仕上げられている。所属時期は不明であるが、縄文時代のものとみられる。

調査結果について

調査範囲内に設定した各グリッドのうち、6グリッドから遺物の出土が確認できた。そしてこれらグリッドの分布は大きく3地点に分けることができる。

まず一つは旧石器時代に属するとみられる黒耀石製の石器類がまとまって出土した踊場湿原の西端から南側に開析する沢の上部付近に集中したKRB90～93グリッドの地点がある。最も近くを確認されている遺跡としては300m程離れた池のくるみD遺跡がある。なお池のくるみD遺跡は踊場湿原に接した尾根の斜面部が範囲となり、明らかに今回確認された地点とは立地の上からも別個である。したがってこのKRB90～93グリッドの地点は、新たに確認された遺跡の一部分と見なすことができるだろう。これら石器の出土層位は、いずれも3a層としたソフトロームであ

るが、先に述べたとおり3a層は、礫を含み移動しながら堆積した可能性が強い土層である。したがって、これら遺物もその出土地点が沢状地形であることを考慮するならば、上流からの流れ込み、もしくは下層からの巻き上げの可能性があるが、原位置が失われていることが想定される。

KRD10グリッドは池のくるみD遺跡の範囲から南方へ50m弱離れた地点となるわけだが、石器は単独出土であり、流動的に堆積したとみられる土層中に包含されていたものであるため、原位置を留めていない可能性がある。しかもこのグリッドと池のくるみD遺跡とは標高差がかなりあり、これをもって遺跡の範囲を拡張させるのは現況では難しい。将来的な調査として、池のくるみ遺跡群の広がり調査として確認する作業が必要であろう。

KRD21グリッドも池のくるみD遺跡に隣接し、ここでは旧石器時代、縄文時代早・前期、平安時代として知られていた池のくるみD遺跡の帰属時期に該当しない弥生時代後期の土器片と、それに伴う黒耀石の碎片等が出土した。この地点については先のKRD10グリッドと異なり、遺跡の範囲とはなだらかな傾斜面で連続している。この立地条件から判断してKRD10グリッドの地点を池のくるみD遺跡の範囲の一部として扱うことは妥当であると考えられる。しかしながらこの地点においては遺跡の機能は十分解明されなかった。出土状況から石器製作址の可能性も推測できるが、弥生期の遺跡として妥当かどうかは今後の検討課題である。

以上のことをまとめると、KRB地区で石器の出土した地点は、旧石器時代に属し、地形の状況から池のくるみ遺跡群とは別個の独立した遺跡と扱うことができる。この遺跡については現在我々がジャコッパラ遺跡群と呼ぶ霧ヶ峰のジャコッパラ地籍に展開する旧石器時代遺跡群の一部に含めておくことが当面の作業としては有効であると思われる。

この新発見の遺跡についてはジャコッパラNo.12遺跡と扱うことにし、本年9月28日～11月8日の期間、別荘地開発事業に伴う道路造成に先立つ緊急調査として発掘調査が行われた。そして、3a層の下部に試掘の段階で周辺にみられた4層が遺跡内に堆積することが確認され、その層中に700点弱の旧石器時代石器群が包含されることが明らかになった。この調査の概要については後章で説明したい。

KRD地区における2地点では、いずれもローム層からの遺物の出土はなかった。池のくるみ南方にある尾根頂部のKRD10グリッドの地点については、現況では遺跡とするには条件が整っておらず、遺跡範囲としての認定は保留される。本調査範囲の東端のKRD21グリッドの地点は、弥生土器を伴うことから弥生時代の遺跡として、また立地から池のくるみD遺跡の一部と解釈でき、発掘調査歴のない池のくるみD遺跡の内容を解明するうえで貴重な成果と言える。また、ジャコッパラ遺跡群の調査において、弥生時代に関する資料の出土は今回が初めてであり、弥生時代の霧ヶ峰における高地性遺跡として、この遺跡の位置づけは今後のジャコッパラ遺跡群の研究において重要な課題と言えよう。

IV 調査のまとめ

1. ジャコッパラ遺跡群における今回の調査範囲の位置づけ

発見された遺跡及び遺物について

今回の調査区域はKRB地区・KRC地区・KRD地区の3地区にわたった。そのうちKRB地区・KRD地区の北端、すなわち通称池のくるみと呼ばれる踊場湿原の南方では旧石器時代と弥生時代の遺跡が、さらに表面採集では縄文時代の石鏃が採集されている。以下、それらの内容について検討してみたい。

【旧石器時代】 池のくるみ下方のKRB地区において設定した4ヶ所の試掘グリッドのローム層中より旧石器時代の石器類が若干量出土した。出土する範囲は沢状地形の谷部を中心とした広がりを示すことが明かとなり、この地点を新たにジャコッパラNo.12遺跡として扱うことになった。出土した石器は剥片・碎片類がほとんどであり、ツールと認定されたものとしてはKRB91グリッドから出土した剥片の末端を折取り、調整を加え側縁とし、剥片の縁辺を刃部とする石器がある。刃部には細かな刃こぼれがあることから切断を機能とする石器と判断されるが、ナイフ形石器の形態に含められるかは判断が難しい。このほか打面調整を施した剥片が1点あり、寸詰まりで幅の広い剥片が目立つ。

これらの剥片のほとんどは表面に残された剥離の方向からみて一定の方向から連続して打ち剥がされたものであることがわかる。このことは表面採集品を含め、発見された石核にみられる剥片剥離作業の在り方と符合する。

試掘グリッドより出土した石器群の時期及び特徴については、出土点数の少なさが最大のネックであるが、明確な時期判定に結びつくツールを欠くこと、遺物包含層となる多量の安山岩礫を含むソフトローム層が周辺の土層堆積状況の観察から当時における二次堆積層の可能性が考えられ、そのため原位置性、一括性が乏しいこと等の理由から、確固たる位置づけは難しいと思われる。しかし、後述するように分布調査のあと実施されたジャコッパラNo.12遺跡の本調査により遺跡の帰属時期はおおよその判断がついている。

【縄文時代】 今回の分布調査では縄文時代の遺物は表面採集による石鏃がKRB地区で1点表面採集されたのみで、KRC地区・KRB地区・KRD地区のいずれでも土器類や陥し穴状遺構などは発見されなかった。

この石鏃については採集地点に隣接する池のくるみD遺跡で縄文時代の遺物が採集されている

ことから、これに関連するものかも知れない。またジャコッパラ遺跡群で確認されている陥し穴状遺構が今回の調査区で発見されなかったことは、陥し穴状遺構の設置に、立地条件が大きく関わっていることの根拠となろう。

【弥生時代】 霧ヶ峰の弥生時代の遺跡としては唯一、細久保遺跡で弥生中期の存在が知られていたが、今回KR D地区において池のくるみD遺跡の範囲に含まれる地点から弥生後期の土器が出土したことにより、池のくるみD遺跡が弥生時代にも属することが明かとなった。なお隣接する茅野市では標高1000m以上の八ヶ岳山麓や池の平周辺で、弥生時代の高地性遺跡が発見されている。これらはその地理的条件から、隣接地方への交通路や狩猟のための拠点であったとみられている（茅野市1986）。

池のくるみは茅野市米沢に通じる檜沢川の源であり、池のくるみD遺跡はこの川に面してある。このことから判断して、今回発見された弥生土器は檜沢川を霧ヶ峰への往路として利用してきた人々によって残された可能性が強い。しかし、この高地性遺跡が池のくるみ周辺に展開した理由については憶測の域を出ない。また、弥生土器に伴出した黒耀石碎片がはたして黒耀石の利用頻度が低い弥生時代に帰属するのも検討する必要があるだろう。

2. ジャコッパラNo.12遺跡の調査の概要

【調査の経過】 分布調査により新たに発見されたジャコッパラNo.12遺跡の範囲の一部では、別荘地建設開発事業に伴う道路造成が予定されていたため、これに先立ちその範囲を保存する必要性が生じ、開発業者との協議の結果、発掘調査による記録保存を行なうことになった。

本調査は平成5年9月28日から同年11月8日まで行ない、ローム以下の土層より1000点以上におよぶ黒耀石を主体とする石器群が検出された。

【遺跡の位置】 ジャコッパラNo.12遺跡は霧ヶ峰踊場湿原を取り囲む池のくるみから、小さな鞍部をへだてた西南側（KR B地区）斜面の標高1545m前後のくぼ地に発見された（第16図）。くぼ地の最奥部には緩やかに傾斜したテラスを形成しており、下方に至るにつれて、傾斜の急な谷地形に変化する。ジャコッパラNo.12遺跡はこのテラス部分を範囲の中心として考えることができるが、今回本調査を行なった範囲外の沢筋にも遺物の分布範囲の広がることかが確認されている。



ジャコッパラNo.12遺跡の調査

周辺の旧石器時代遺跡との位置関係をみると、昨年度調査を行なったジャコッパラNo.8遺跡とは、直線距離にして約800mほど離れており、踊場湿原周辺に分布する池のくろみ遺跡群とは、100m～1Km程度の距離を有する。

【遺跡の土層堆積状況】 この遺跡範囲内における土層の堆積状況については、前章の分布調査のところで述べたとおりである。しかし、試掘では3層（3b層）としたソフトローム中に大形の安山岩の礫が多量に含まれるため、狭い試掘グリッドの中ではこれ以下の人力による掘り下げが困難であり、旧石器時代の遺物包含層の下限については十分に把握できずにいた。この3層については面的に掘り下げた結果、分布調査で予想されたように、安山岩の礫の包含される状態で、沢の上流より流されて堆積したものであることがわかっている。

発掘調査では第17図に示したとおり、3層ソフトロームの下層に赤褐色を呈する砂質ロームが堆積することがわかり、これは分布調査の際、遺跡の東側斜面において確認されていた4層であると判断された。分布調査の段階では確認できなかったこの4層より多数の旧石器時代遺物が集中して発見され、本遺跡ではこの土層が旧石器時代の主要な遺物包含層になることがわかった。なお、この4層の下部では沢筋に沿って安山岩が河床状に密集して礫層を形成していることも判明し、遺物出土状況との関連が注意された。

4層以下は5層・6層とした安山岩の風化礫が多く含まれる土層が堆積し、ここからは遺物の出土は認められなかった。

【遺物の出土状況】 本調査における旧石器時代の石器類の出土総数は1237点で、層位別点数では2層から234点、3層から320点、4層から683点が出土している。このうち2層と3層（上部付近）の遺物については斜面上方からの流れ込み、もしくは4層からの巻き上げであると判断される。このことは先に述べたとおり、3層が斜面上方から安山岩の礫を多量に混在させながら堆積した2次堆積層であることと、これらの層においては石器の分布状況が、散漫であり集中地点を形成していなかったことから裏づけられよう。

4層における石器の平面分布は第18図に示したとおり、沢状を呈する地形のくぼんだ部分に集中しており、ちょうど調査区北東から南西に向け、帯状に分布する。この石器分布のもっとも集中する範囲は、河床状の礫層が広がる範囲と一致しており、石器類はこの礫層の上面に密着して遺されていた。

これらのことを総合すると、ジャコッパラNo.12遺跡ではこの4層が文化層に相当し、この層中にみられる礫層の上面が生活面になると考えられる。しかし、礫層範囲である調査区グリッドC・D・E列を外れると遺物の分布が極端に少なくなり、なおかつこの礫層部分が調査区内においてくぼ地としてもっとも低くなる場所であることを考えると、地形の高まりには遺物が残らず、低い部分に遺物が分布している傾向も指摘しうる。つまり、この遺物分布には本来傾斜面にあった遺物が礫層面である低部に流れ込み、集中分布の状況が作られたという自然の影響も考えられないわけではないのである。

しかし、この集中分布が人為的であるのかそうでないのかは、遺物の接合作業等を経て判断されるものと思われる。現段階ではこの作業が進行していないので、今後の整理によって明らかにすべき課題と言える。

また、次で述べるが、4層より出土した石器群には、最低二つの時期の石器群が含まれている可能性が高く、この文化層自身単一時期に形成されたものではなく、かなり長期間にわたって形成されたものと考えられる。

【4層出土の石器類について】 4層出土の石器群で、現時点において確実にツールとして判断されたものにはナイフ形石器、台形様石器、槍先形尖頭器、角錐状石器、打製石斧、揉錐器、ハンマーストーンがある。それぞれの点数の内訳は、ナイフ形石器17点、台形様石器15点、槍先形尖頭器1、角錐状石器1、打製石斧2、揉錐器2、ハンマーストーン1である。

石材はほとんどが黒耀石であるが、ナイフ形石器の1点に安山岩が用いられ、打製石斧は2点とも粘板岩、ハンマーストーンには砂岩が用いられている。

第19図には4層から出土した主な石器を示した。第19図1～6・8はナイフ形石器であり、1～6は横長剥片もしくは剥片を素材とする、二側縁加工を施したナイフ形石器で、いわゆる茂呂型と切出形の2種類が主要な形態となる。また図示しなかったが、剥片の一端を折取り、その折れ面に調整加工を施すものもあり、これをナイフ形石器に含めるか検討を要する石器もある。ナイフ形石器のブランディングは裏面から入るものがほとんどであるが、3や6のように表裏面からの対向調整を施すものもある。8は縦長剥片（石刃）を素材とし、基部に部分加工を施してナイフ形石器としている。1～6の横長剥片を素材としたナイフ形石器は3cm程度の小型のものが目立つ。また8のような大型の縦長剥片を素材に用いているナイフ形石器はこの他1点だけで、多くは横長剥片または剥片を素材としたものである。

第19図9・10は台形様石器である。表面の刃部には自然面がみられ、裏面は素材となった剥片の主要剥離面が残される。素材の打面が残され、基部を覆うように平坦剥離による二次加工が施されるが、その程度は個体差がある。形態はいずれも基部形状が収束するもので、9・10のようにペン先形とも呼べるような刃部が尖り菱形に近いものと、刃部が直刃となり台形に近いものの二者に大別できる。素材は寸詰まりの幅の広い剥片が用いられているとみられ、10のように部厚な剥片を素材としたものもある。

第19図7は先端が欠損した小型の槍先形尖頭器である。裏面に主要剥離面が残ることから剥片を素材に用いていることがわかる。形態は細身の柳葉形を呈するとみられ、表面には一部調整が加えられるが、専ら裏面調整により形が整えられている。

第17図11・12は粘板岩製の打製石斧である。2点とも中央で折損し、第18図の分布図に示した位置でそれぞれ離れて出土・接合している。11は長さ23cmをはかる完形の石斧である。素材は節理面で割れた方形の板状礫を用い、素材の両端にのみ調整加工を施して刃部と基部を作り出している。刃部は表面に大きな剥離を加え、錯交するかたちで裏面にも剥離を加えることで鋭角な刃

を作り出している。旧石器時代の石斧において、このように素材形状をほとんど変えない石斧の加工例は類例が見当たらない。ほぼ中央に折れが入り、表面から衝撃が加わり破損したとみられ、破損部には空隙が生じている。意図的な折れなのか、使用による折れなのか判別はつかないが、使用による折れであるならば、石斧の着柄法に関連するものと思われ興味深い。

12は刃部に相当する部位が欠損しているため、本来の長さは不明である。現長は17cmをはかる。11と同様、板状礫を素材としており、刃部形態は不明であるが調整加工は基部および右側縁に階段状剝離を行なうことで形を整えている。左側縁は自然面のままである。破損面は自然石の節理部分があたる。

これら石斧は全体に風化が進んでおり、11の刃部については使用による擦痕もしくは刃部整形としての磨きの痕跡ははっきりしなかった。しかし、石材としてみれば、おそらくは調整剝離のみで製品として仕上げられたものと思われる。

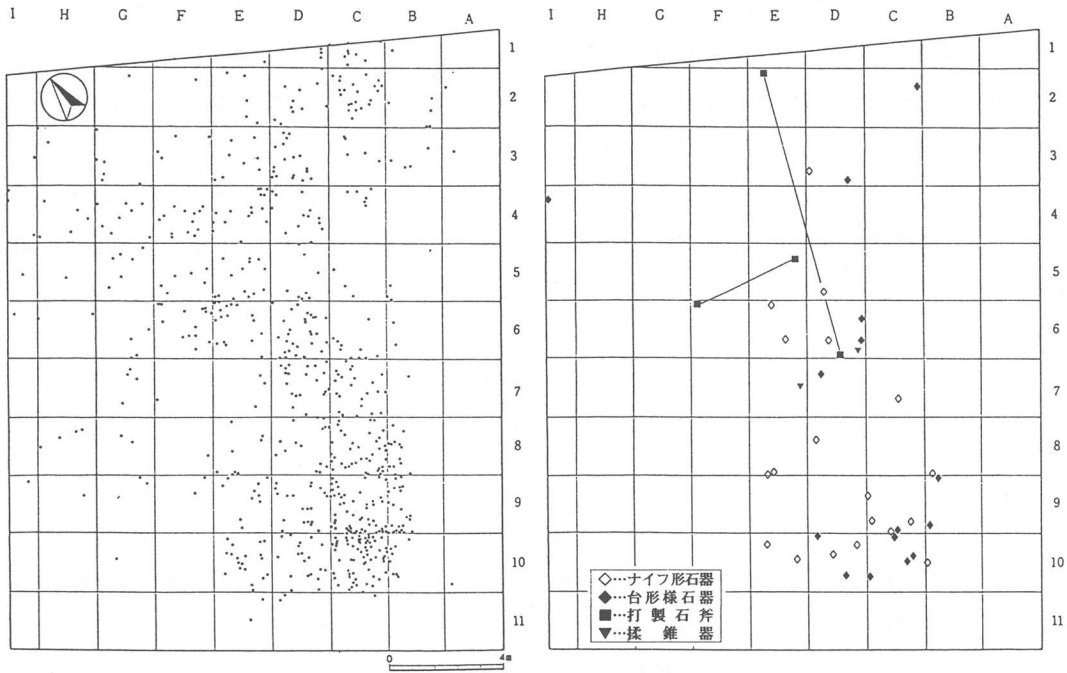
この他図示しなかったが、剝片の両側縁に急斜な加工を施し、先端が尖り、断面が三角形を呈するいわゆる角錐状石器1点が上記の石器類に伴って出土している。また、揉錐器のうち1点は、小さくなった残核を素材として錐部を作り出したものである。砂岩製のハンマーストーンは破損しており、一部しか残っていない。棒状の礫を用いたとみられ、先端部には敲打による凹みが生じている。類品はジャコッパラNo.8遺跡でも出土している。

石核（残核）はすべて黒耀石製であり、61点が出土している。これらのほとんどは最終的に寸詰まりもしくはやや幅広の剝片を剝離した痕跡をとどめている。単剝離打面を設けるものがほとんどで、90°打面転移を行なっているものもある。背面に自然面の残るものが多い。また、石核の原料となる黒耀石原石も40点出土しており、鶏卵大から拳大程度の円礫または亜角礫が目立つ。

剝片類は分類が充分でないため省略するが、先述の小形のナイフ形石器の素材に関連する（横長）剝片と、台形様石器の素材とみられるやや部厚な寸詰まりの剝片がみられ、後者のほうが出土数としては多い感触がある。なお、第19図8のようなナイフ形石器の素材となるような大形の縦長剝片は認められなかった。

このようにジャコッパラNo.12遺跡では、一般的なローム層とは異質な特徴の4層から多種にわたる石器で構成される石器群が検出された。しかし、その内容については現在の石器群の変遷観に照らし合わせてみても、複数の時期の異なる石器群で構成されていると考えられるものであった。

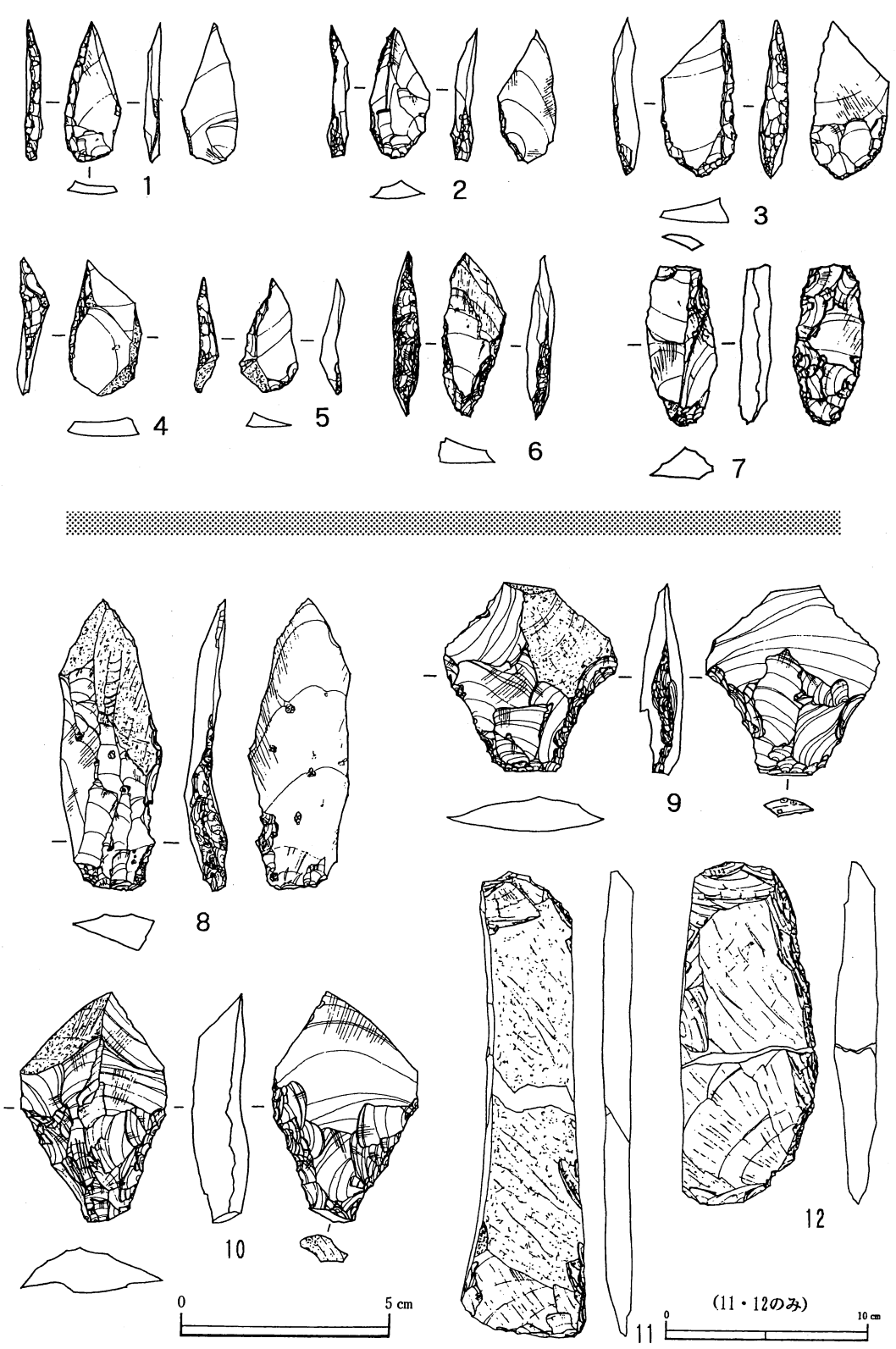
まず時期判別として指標となるものから抽出してみると、第19図9・10の台形様石器、同図7の槍先形尖頭器があげられる。前者は近隣の池のくすみC遺跡やジャコッパラNo.8遺跡で発見されており、諏訪郡内では原村弓振日向遺跡（大竹幸1989）でも発見されている。この台形様石器はA T降灰以前の石器として扱われており、後期旧石器時代においても前半に属するとされている。本遺跡の台形様石器もこれに準ずるものとしてよいだろう。そして、後者の槍先形尖頭器は後期旧石器時代の後半から終末にかけて出現する石器であることを考え合わせると、4層の石器



第18図 4層における石器分布



ジャコッバラNo.12遺跡4層の調査



第 19 図 ジャコッパラNo.12遺跡 4 層出土石器

群は後期旧石器時代において、前半と後半の2つの段階に分けることの可能性が指摘できる。

それではその他の石器類と合わせてどのようにこの石器群を分離できるであろうか。まず、台形石器を伴うA T下の石器類としては、第19図8の大型の縦長剥片(石刃)を素材とし、基部に部分加工を施したナイフ形石器、それに同じ素材を用いている2点の打製石斧がこれに含まれる最少の単位としてとりあえずは考えられよう。なお打製石斧については近隣では諏訪市茶白山遺跡の石器群などに含まれることが知られていたが、粘板岩製のものは知見に無かった。材質や加工の細部において違いがあると思われるが、弓振日向遺跡出土の石斧(局部磨製?)が本遺跡出土の撥形の石斧に類似しようか。

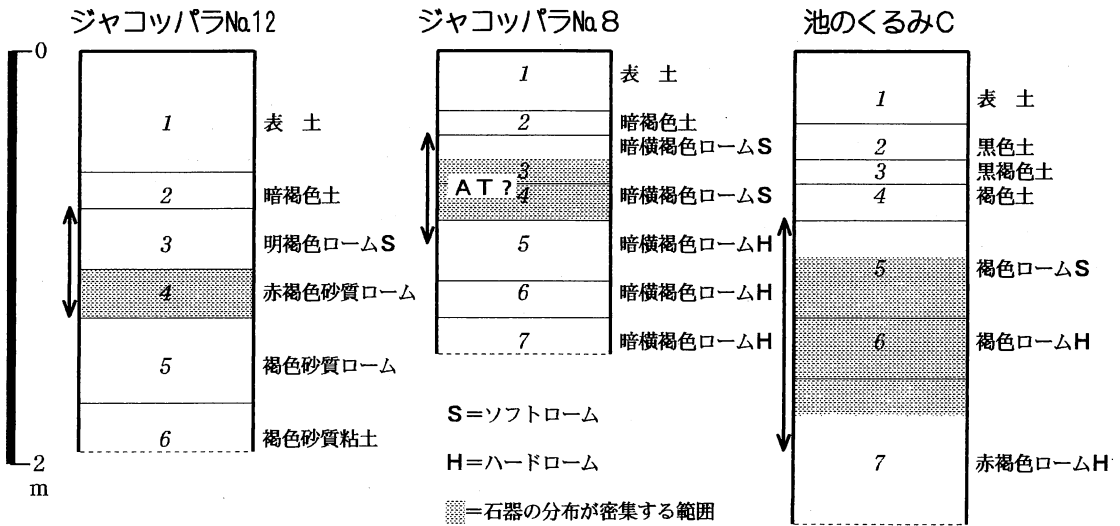
次に槍先形尖頭器に伴う石器類として、まず圧倒的に出土数の多い横長剥片を素材とした小型のナイフ形石器を考えてみたい。細部の特徴について省略するが、これらのナイフ形石器と同様の素材を用い、同じような形状に調整加工を施したものとして、小県郡和田村男女倉遺跡B地点上層ならびに同J地点のナイフ形石器が酷似する(森嶋他1975)。ここでは槍先形尖頭器を伴うことが確認されているが、その割合は断然、槍先形尖頭器よりもナイフ形石器の方が多いという特徴がある(宮坂1989)。また、本遺跡でも確認された角錐状石器が出土しているなど、全般的な石器群の構成も類似する。小型のナイフ形石器はバリエーションが認められ、これらが一群として括れるものかは検討を要するが、石器群のおおまかな位置づけとしては妥当ではないだろうか。

ジャコッパラNo.12遺跡の4層の石器群は、大別して2つの時期の異なる石器群の混在で成り立っていると想定できた。後期旧石器時代の前半と後半に分別した石器群については、層的一括されるものであり、現場所見においても垂直層位での分離は不可能であった。このことは水平分布についても同様であった。

遺跡の形成については、かなり古いローム層に相当する土層である5層上部に、沢筋に沿って礫層が河床のように上流から流れ込み、その後この礫上面を生活面とする石器製作集団が、おそらくは約2万年以前の後期旧石器時代の前半に訪れたのが始まりとみられる。しかし、沢筋ということから土層の堆積が安定せず、旧石器時代の後半のある時期まで堆積と流出を繰り返しながら複数の時期の異なる石器群を包含する4層が形成され、やがて大規模に3層が沢筋に流れ込むことで、4層がパッキングされ、以後、土地利用はされず現在に至ったものと判断される。

しかし、この4層自体が上流から流れてきて堆積したものであるならば、包含される遺物の原位置は本来上流にあったことが考えられる。石器類にローリングがまったく認められない点を考慮するならば、遺物の移動は最小範囲であったと考えたい。多量の剥片、碎片が集中している箇所もあり、石器製作の痕跡も留めていることから、ある程度は原位置が保たれていると考えられないだろうか。今後の分析では石器製作の流れを追う中で遺跡の形成過程、ならびに石器群の時間的な分離・抽出を試みて、遺物の原位置性について解決して行きたい。

その他、ジャコッパラNo.12遺跡を特徴づけるものとしては40点にのぼる黒曜石原石の発見である。近隣の池のくるみC遺跡では、石核は多く見つかったが、原石は数点ほどの出土であっ



第 20 図 池のくるみ周辺の A T 下石器群の出土層準の比較
 (諏訪市教委1993・金井他1969より作成)

たと言われる。また、ジャコッパラNo.8 遺跡でも原石は 1 点だけであった。ジャコッパラNo.12 遺跡では遺物分布において、6 m 範囲の原石を主体とする集中地点も認められ、解釈は不十分であるが原石保有に関する施設であるかも知れない。いずれにしても一遺跡における原石の保有量は近隣遺跡においても卓越しており、遺跡の性格を暗示するものとして注意される。

3. 黒耀石原産地のなかでのジャコッパラ遺跡群の位置

当市では黒耀石原産地遺跡群の調査として、霧ヶ峰南半を占める通称ジャコッパラ地籍を中心に調査を進めてきた。この調査の成果としては、今まで存在が明かでなかった旧石器時代の遺跡がいくつか知られるようになり、茶白山遺跡・上ノ平遺跡などの諏訪湖東岸遺跡群と八島・池のくるみの遺跡群の間を結ぶ遺跡群として把握されるに至った(高見1992)。なおジャコッパラには黒耀石原産地は含まれず、最も近い下諏訪町星ヶ台の産出地でも 3～5 km の距離があり、ジャコッパラ遺跡群に隣接する池のくるみ遺跡群を含めても黒耀石原産地直下に形成された遺跡群とは言えない。和田峠、星ヶ塔、星糞峠などの黒耀石原産地直下には石器製作を集中的に行ったとみられる遺跡群が残されている。

霧ヶ峰山中にある旧石器時代遺跡群は黒耀石原産地とは若干の距離をおいて分布しており、八島遺跡群、池のくるみ遺跡群はそれぞれ八島湿原、踊場湿原の周辺に形成される特徴がある。この要因の一つには当時は水場であった可能性が高い湿原周辺に集まってきた獲物の狩猟場として



第 21 図 霧ヶ峰周辺の主な縄文遺跡の位置

利用されたことが指摘されている。八島も池のくるみも遺跡内で石器製作が行われていたことは確実であり、その原料は近隣の出産地から運んできたと思われる。ただし出产地直下の遺跡と異なり、こうした遺跡では石器製作以外に居住地として利用されていた可能性もあり、石器生産においてはもっぱら石器製作を目的とした鷹山遺跡などは生産量の規模において絶対的な差が認められる。ジャコッパラNo.12遺跡では黒耀石原石が40点ほど出土している。角礫状のものと角の落ちた円礫に近いものが認められるが、採取場所が異なることを現わしているのだろう。また原石サイズは一定した感じがあり、原石採取にも基準があったのだろうか。

ジャコッパラは平坦な尾根と痩せ尾根によって構成されており、尾根の間には大小の谷が入り小河川の流れるところもある。また、踏査によりこうした谷の頭には「谷戸」として小さな湿地が確認されている。ジャコッパラの各遺跡にはこうした湿地を囲むようにして立地しているとみられるところがある。

霧ヶ峰を源とする河川には諏訪湖に流れる角間川と、茅野市側に流れる檜沢川・横河川があり、後者がジャコッパラを流れる河川である。旧石器時代のジャコッパラ遺跡群の位置づけとしては、こうした河川や尾根筋をたどり、平地から高原へ黒耀石原石採取のため往来する際の中継点であり、狩猟活動の拠点であったと評価できる。部分的な試掘の結果であるがジャコッパラ各遺跡の石器の出土量に偏りがあることはこの状況を反映したものと言えないだろうか。

縄文時代については黒耀石出产地関連の情報は乏しくなる。地点的には土器に伴って縄文時代の石器類が発見されることがあるが、多量の原石を運び込み石器製作を行うという姿は見えてこない。むしろ角間川の中流にあたり霧ヶ峰への入り口となる縄文前期後半～後期に営まれた穴場遺跡、唐沢遺跡、大グッショ遺跡には黒耀石貯蔵に関する遺構がみられるようになり、集落内に多量の原石が運び込まれる様子が観て取れる。またこのことは霧ヶ峰高原の周縁にあたる茅野市米沢周辺の遺跡にも認められる。これは集落地から出产地への直接採取におよんだことを現わしていると考えられ、霧ヶ峰はその出产地へ行き交うルートとして利用され、生活地点としての利用は薄れていったのだろう。

そうした反面、霧ヶ峰では谷筋にのぞむ尾根の斜面には陥し穴が多数構築され、縄文時代の一大狩猟場として、従来の生活地点にかわり利用されることになる。ジャコッパラ遺跡群内では標高1300m～1500mの範囲に分布し、ほぼ1km程度の間隔で陥し穴群が形成されていることが、これまでの調査で確認されている。時期的には縄文前期前後とみられるが、各陥し穴群の所属時期は不明確なところが多い。この他、霧ヶ峰周辺で縄文時代の陥し穴群が分布するのは、標高1000m前後の八ヶ岳西南麓から霧ヶ峰南麓付近である。

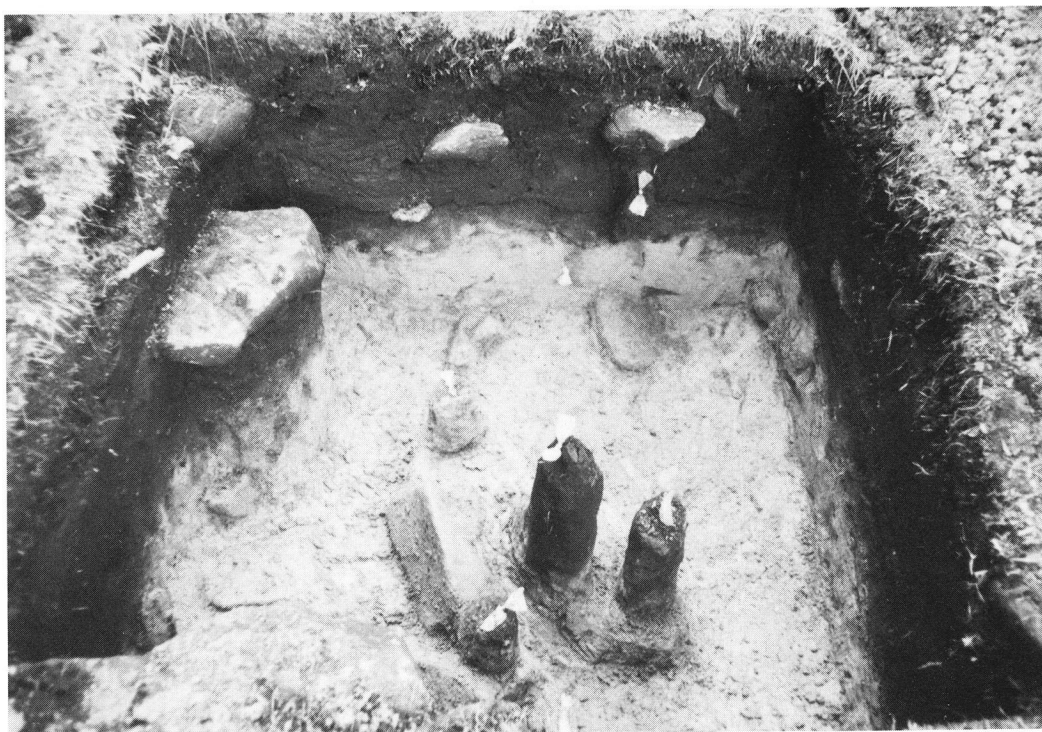
縄文時代において集落地が諏訪湖盆から八ヶ岳山麓に展開するにしたいがい、霧ヶ峰は黒耀石出产地へのルート、または狩猟場として利用されていたことがうかがえる。そして、黒耀石製石器の用いられなくなる弥生時代では、霧ヶ峰は狩猟地としてのみ利用されることになったのだろう。霧ヶ峰における縄文時代以降の遺跡の希薄さは、黒耀石の需要が跡絶えることと一致する。



1. KRB・KRD地区遠景
(手前山腹が池のくるみ遺跡、その背後の山林が調査区域)



2. KRB地区の現況
(KRB102グリッド付近)



3. KRB90グリッド遺物出土状況



4. KRB91グリッド遺物出土状況



5. KRB92グリッド遺物出土状況



6. KRB93グリッド遺物出土状況



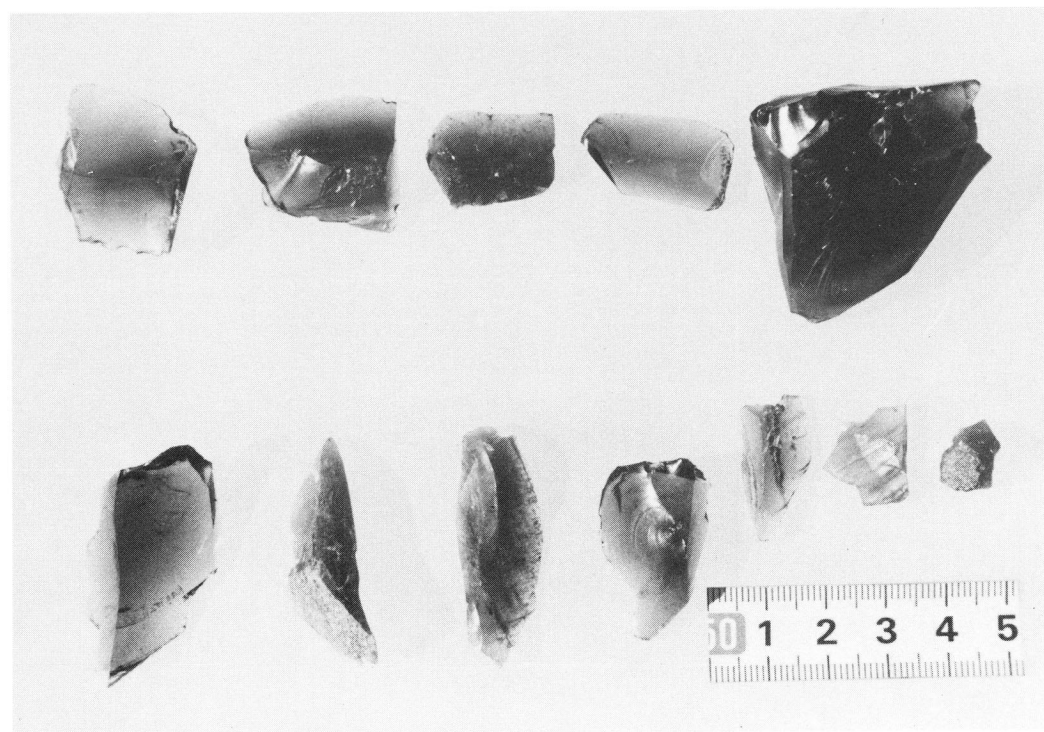
7. KRD10グリッド遺物出土状況



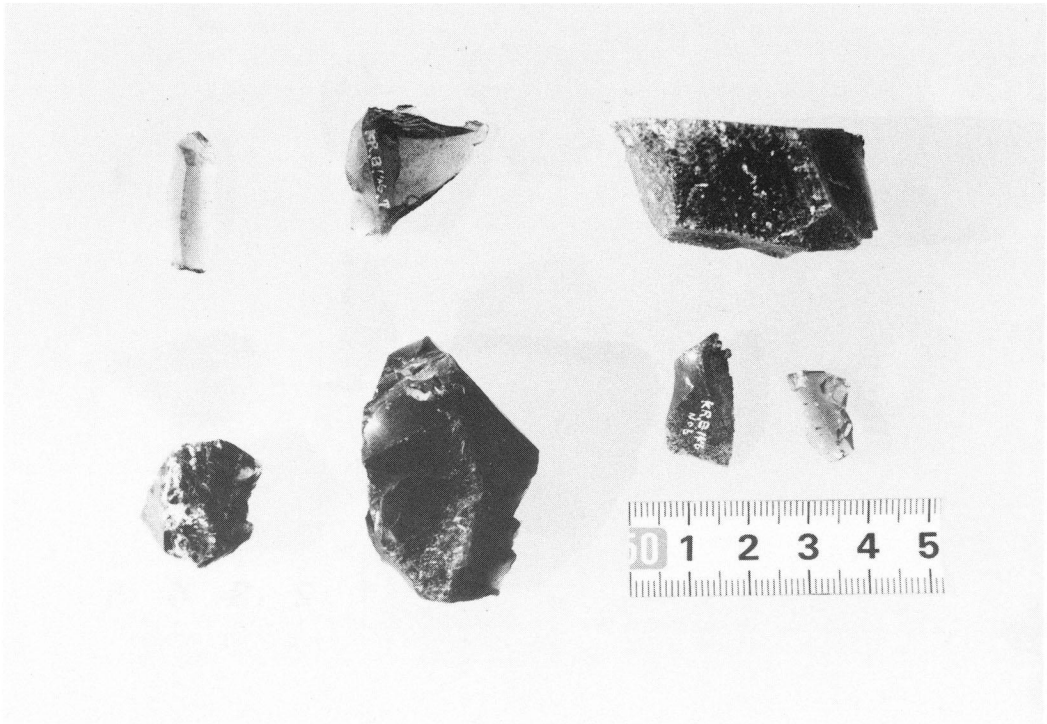
8. KRD21グリッド遺物出土状況



9. KRB90グリッド出土遺物



10. KRB91グリッド出土遺物



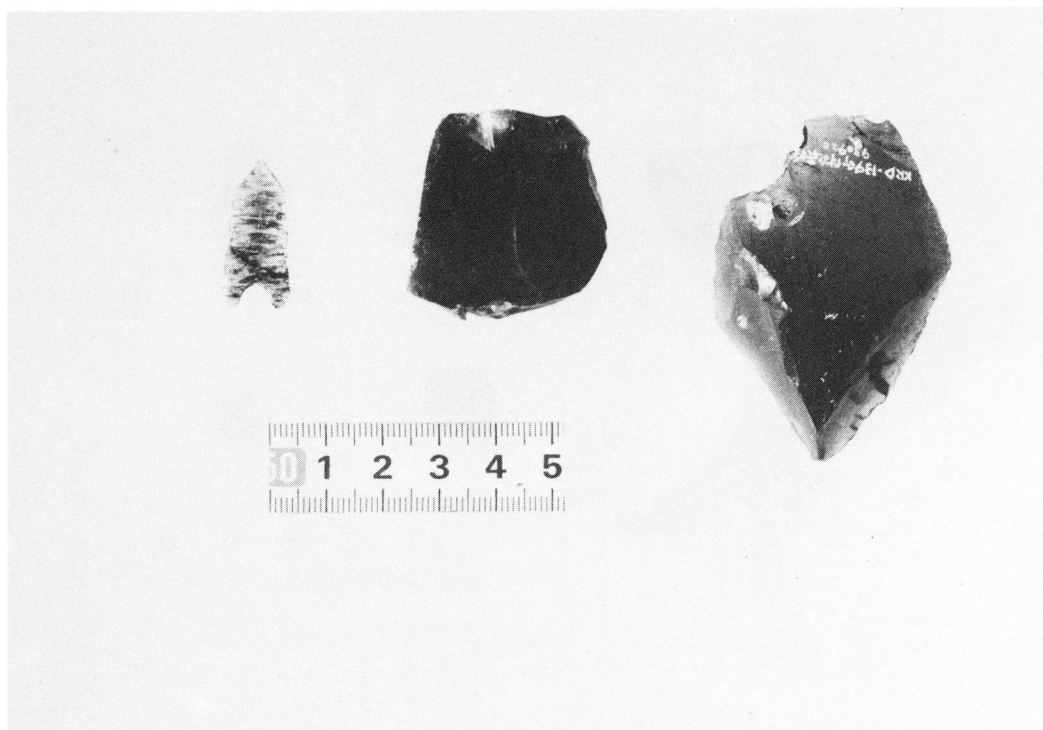
11. KRB92グリッド出土遺物



12. KRB93グリッド出土遺物



13. KRD10グリッド出土遺物



14. KRD21グリッド出土遺物

ジャコッパラ川

－平成5年度長野県黒耀石原産地遺跡分布調査概報－
(諏訪市霧ヶ峰ジャコッパラ遺跡群遺跡分布予備調査2)

平成6年3月10日

編集 諏訪市高島1-22-30
発行 諏訪市教育委員会
印刷 (株)マルジョー上田印刷
